女鑑
明治三十四年一月廿四日發兌
第貳百廿一號
國光社

女鑑第貳百貳拾壹號

目録

定價
一册　金拾錢
六册三ヶ月分　金五拾五錢
十二册半年分　金壹圓
全國無遞送料

明治三十四年一月十九日印刷
明治三十四年一月二十日發行

編輯兼發行人　川崎直衛
印刷人　並木真雄
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所　國光社
東京市京橋區南傳馬町一丁目七番地
發賣元　靜思舘
(電話本局一千三百七番)

稟告

從來本誌の發賣に係る事務は國光社雜誌部に於て取扱ひ居候處向後東京市京橋區南傳馬町壹丁目七番地靜思館に於て取扱ひ候事に致候間自今國光及女鑑に關する御照會、御送金、御通知等は總て必靜思館宛にて御發信被成下度候也追て編輯に關する件は從來の通り國光社編輯部宛にて御發信被成下度候

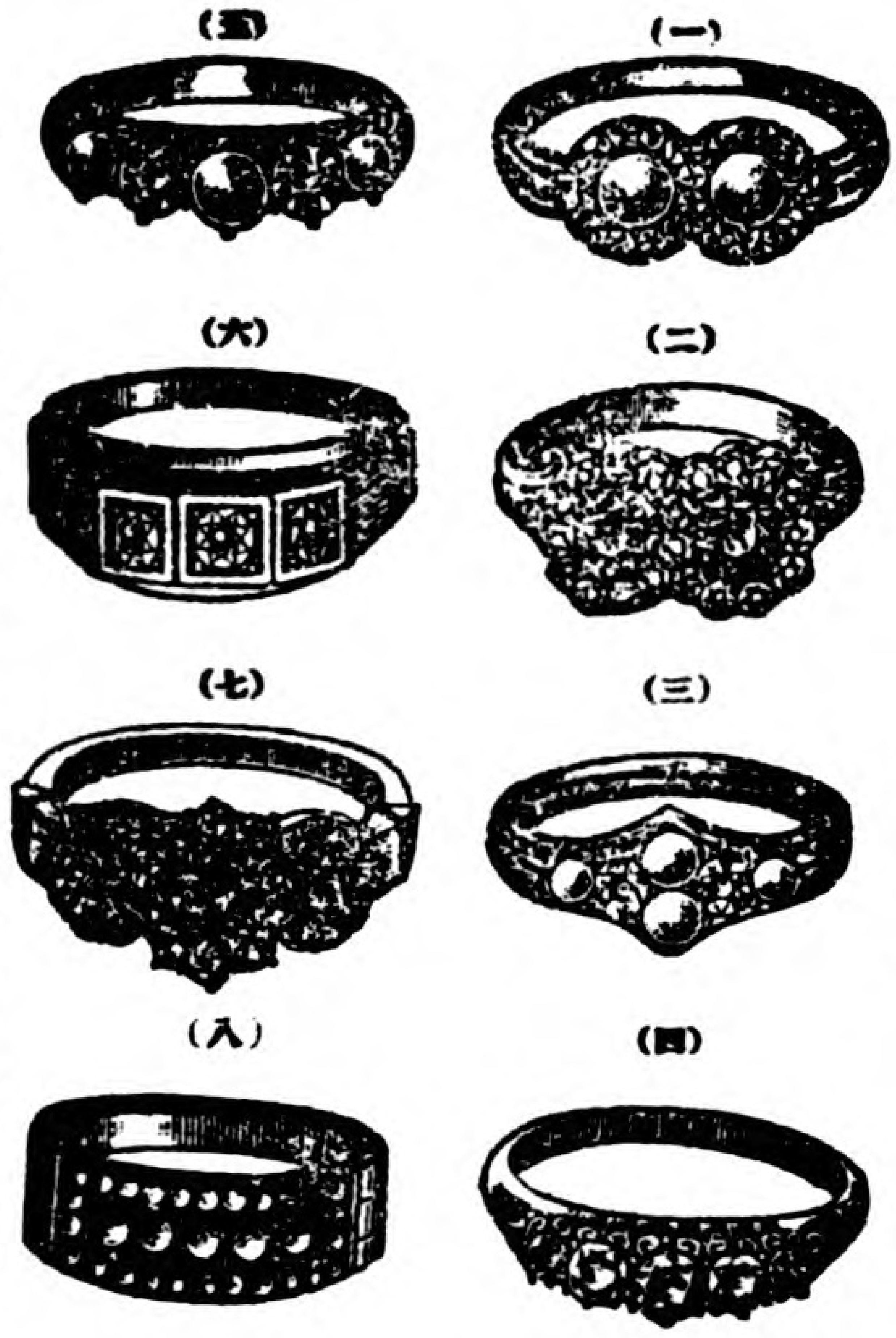
明治三十四年一月

東京京橋區築地二丁目廿一番地
國光社編輯部

東京京橋區南傳馬町一丁目七番地
靜思館

追て本號は一月二十日に製本出來可致筈の處印刷製本等の業務目下非常に輻湊し爲に二月四日に至りて漸く製本出來の運に至り候段深く愛讀諸孃に謝する所に有之候向來は必期日を誤らざる事を期し可申幸に御諒承あらんことを祈上候

寶石入指環



(一) (二)(三) (四) (五) (六)(七)(八)

ダイヤモンド及キャツアイ入甲價八拾五圓●乙價
七拾五圓●全眞珠及チパール入甲價參拾參圓●乙
價參拾圓
ダイヤモンド入甲價參百圓●乙價貳百八拾圓
ダイヤモンド及眞珠入甲價百貳拾圓●乙價百圓
ダイヤモンド入甲價貳百圓●乙價百七拾圓
ダイヤモンド及エメラルド入甲價百五拾圓●乙價
百貳拾圓
ダイヤモンド及キャツアイ入甲價貳百圓●乙價百
七拾圓●全ダイヤモンド眞珠入甲價百八拾圓●乙
價百五拾圓
ダイヤモンド入甲價百八拾圓●乙價百五拾圓●全
ルビー及サツノアナ入甲價五拾圓●乙價四拾參圓
ダイヤモンド入甲價五百圓●乙價四百參拾圓
眞珠入甲價參拾圓●乙價貳拾五圓

●市外遞送料金貳拾錢

此ノ外金又ハプラチナ地ニ種々ノ寶玉ヲ裝嵌シタルモノ及彫刻品夥多有之候間御來車ノ上現品御一覽下サルカ郵便御注文ナレバ寶石入若クハ彫刻付等ノ區別ヲ指示シ代金御送附アレバ其價ニ相當ノ品ヲ精撰シテ調進スベシ若シ御意ニ適ハザル時ハ御購求當日ヨリ一週間（弊店商品中時計ニ限リ三十日間）以內ハ（府外ハ相當ノ往復日數ヲ加フベシ）凡ソ其物品ニ破損或ハ毀傷ナキニ於テハ何時ニテモ需ニ應ジテ他ノ物品ト交換シ又ハ原價ニテ買戻シ聊カタリトモ其爲ニ手數料若クハ割引等ヲ加ヘサルベシ其他ノ手續ハ屢々各新聞紙ニ廣告スル所ノ弊堂店則ニ詳ナリ

東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八、十九番地
（電話番號新橋三百三十三）
（長距離電話番號新橋三百三十三大阪東七百卅三）

時計及寶玉類
貴金屬美術品商

妙技一等賞牌



天賞堂

天賞堂小川町出張所 東京神田小川町（電話本局二一六〇）
天賞堂橫濱出張所 橫濱尾上町五丁目（電話八七六）
天賞堂大阪出張所 大阪心齋橋北詰（電話東七三三）
天賞堂名古屋出張所 名古屋市玉屋町二丁目
天賞堂廣島出張所 廣島市大手町三丁目六十五番地
天賞堂熊本出張所 熊本市上鍜冶屋町十番地
天賞堂長崎出張所 長崎市今鍜冶屋町四十番地
天賞堂福岡臨時出張所 福岡市橋口町榮屋方
天賞堂小樽臨時出張所 北海道小樽色內町越中屋方

忠僕市兵衛が妻



少女に與ふ

幸か不幸か。そは汝の心に解する隨にせん。苟くも一度生を人間に享けて、女子の身となりたる以上は、人の妻たるべき覺悟を要す。人の妻たらむ以上は、また、人の母たらむ心得なかる可からず。否な、人の子に女子と生れたらむものは、人の妻たらざる可からず、人の母たらざる可らざるなり。言を換へていはゞ、結婚は天然なり、人の自然なり、之に戻るべからず。之に反く可からず。

かく言はゞ、汝は必らずや、辭を返してわれを駁せむ。妻らずして業を成し、人多きが如く、嫁がずして事を遂げし女子尠からず。結婚のためには、遂ぐ可かりし事業を半途にして廢絶せしもの多からずやと。それ或は之れあるべし。然れど汝は、これ等結婚せざりし男女の成効は。結婚に依りて倍加するものありしやも計られずといふを否むの理由ありや。また、これ等結婚したりし男女の不成効は、

結婚せざるときにも、また、來るべきにあらざりしやとの問に答ふる所を知るか。われをして言はしむれば、結婚のために事業を廢絶したりといふは、その人人の藉口のみとせむ。結婚せざるがための成効を誇るものには、その結婚を以て、之を増大せしめざりしを吊せむとす。要は結婚の可非にあらずして、良夫良妻を擇むに誤るか。否らざるかの點にあらむのみ。

されば われ重ねていふ、汝は女子たるの本分を盡くさむがためには、必らず結婚せざるべからずと。

既に汝は必らず結婚すべきものと決せば、佳偶を求むるは、最も重要なることたるべしと雖ども、強ひて之を捜索すること彼の婢僕を口入屋に委囑するが如くなる勿れ。婢僕は一時のものなり、結婚は永久のものなり、人生の大事なり、百年苦樂の依りて別るゝ所なり。忽諸に付すべからず、また早急に走るべからず。來るべき期を待たば、良配は必らずや、汝の側にあらむ。

此くて、心を無益の事に費して、彼の徒勞の愚を學ばむよりは、寧ろ退きて、汝の心を養ふの策をなすに若かじ。汝の德はもとより高からざるべからず。汝の識

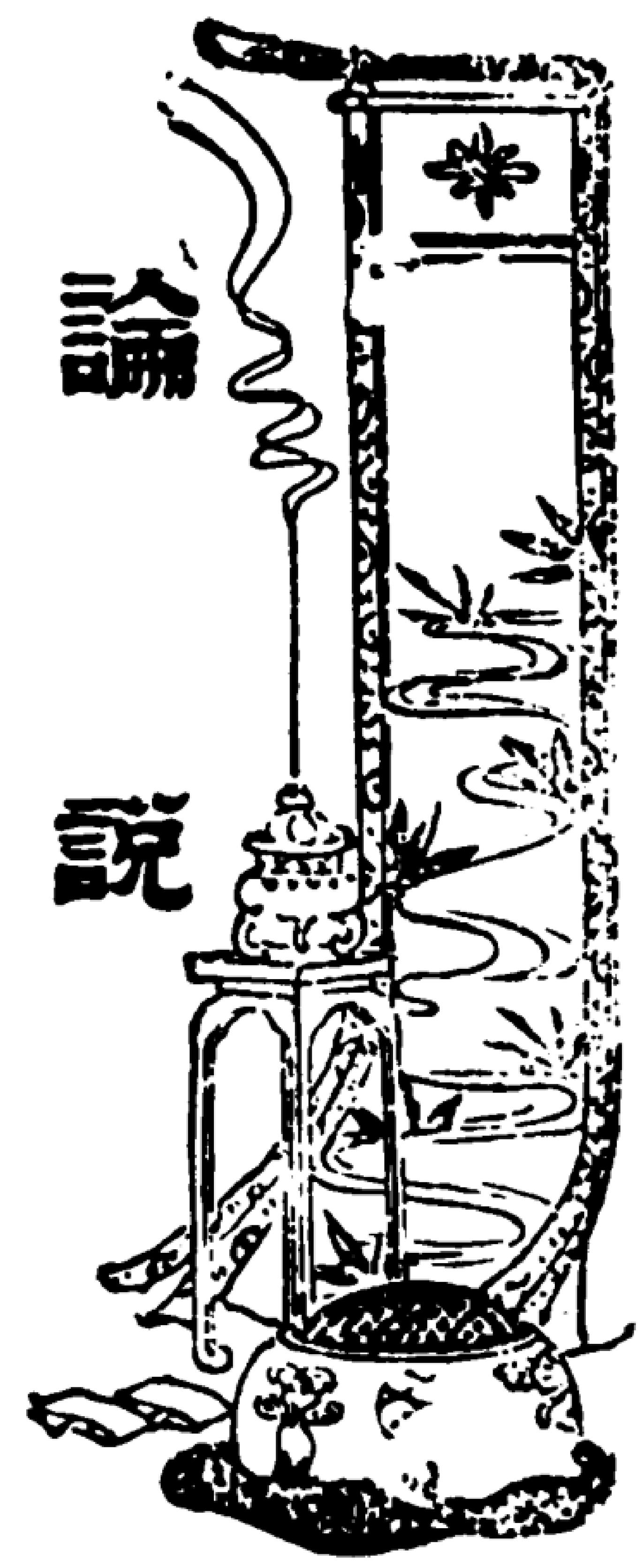
亦狹きを宜しとせず。されど、われは、汝の學ぶこと世間の女學生を云々するもの丶如くならむを希はず。女子は學問の要なしとは、われその或意味に於いては、敢て至當の言ならざるにもあらざるを知る。人を別ちて、男女兩性となしたるは、各々その守る所の職分と、その職分を盡くすべき天賦とを以て、付與せられたるものあらむ。女子遂に男子に及ばざるの點ありとて、甚しく耻づること勿れ、男子また女子に劣るの點多々あり。さるを、男女同權などの妄語にまどはされて、男も人なり、女も人なりといはむは、その意氣愛すべきも、われはその結果に悲しからむを豫想するに憚らず。されば、女子に、男子が講ずべき學藝技術の深遠なる玄理を講究するを以て勸めむは、實に不當なる要求なり。女子無學無識なるべからずといふと雖ども、その女子としての無學無識を耻ぢよといふにして、婦人の文字を知るを忌みたると、その意一なり。

女子に高尚なる政事經濟の原理、算數理化の原則、或は地理歷史の穿鑿を以て、望を屬すべからずして、文藝美術の如きに類るを以ては、之に許るして可なり。若し女子が精を盡して學修すべき學科ありとせば、その庖厨育兒等、家庭の事にあ

たるべき件々に限らむ。現に某博士の妻は、夙に女中の俊髦を以て鳴りながら、却りてその夫の成るべき功を妨げたりとは、世間の遂に囂々とする所、修むべき所にあやまりて、凡ての學問は、女子に不用とせられむとするに至るを思はゞ、女子各々その位置に應ずるの智識を得たる後は、女子專門の事にかへらむは、女子の恥辱とすべき所にはあらざるなり。

學ぶはやがて行ふを意味す。行ふに學ぶ所なきは危しといへども、學びて行ふ所なきは拙なり。たゞ某大將の夫人が久しく泰西にて學びきてふ家庭の學も、その理まことに深遠にして、之を當世に行ふことを得ざるものあるに鑑みて、徒らに高きを希ひて、碧際を望むに忙はしく、下に山川あるを忘れむ、汝世間の嘲笑に陷らざるを保せず。

結婚せよ。良婿を待てよ。徐ろに女子相應の智識を研けよ。これ、われが汝に告げむと欲せし所なり。辭或は盡くさず、その意の在る所を酌め。



愛情につきて（承）

三輪田　眞佐子

萬葉集なる石上大臣の國詩に、

　わぎも子をいさみん山を高みかも
　　大和の見ぬえ國とほみかも

とあり。夫婦の愛は、遠く離るれば離るゝほど、反りて切なり。同じく、大伴宿禰家持の國詩に、

　むかしこそよそにも見しかわぎも子が
　　奥城とおもへばはしき佐保山

と見ゆ。實に、亦、その眞情は、終身忘れざるものなり。

太田道灌は、その子息源吾に先きだゝれ、その一週忌に當りて、

　うらめしく又なつかしき月日かな
　　わかれし去年のけふとおもへば

と詠みければ、源吾の妻涙ながら、

　去年のけふ別れし時も今とても
　　わすらればこそおもひいださめ

と。信に、夫婦の愛情濃かなるものは、つかの木のつかの間も、相忘るゝものにあらず。そは、精神上相結合すればなり。近時、結婚のときにあたり、財寶の有無を問ひ、顔色の醜美を問ふもの多し。果して、結婚の條件、財寶にあらんか。財寶消失するか、若しくは、巨萬の富を積て、財寶の必要を感ずる欲望減せんか。夫婦の情冷澹なるにあらざれば、多情の獸行を恣にする耻なしとせず。亦結婚の條件美貌にあらんか。老いて紅顔衰へん

夫婦の情なるもの、盡くるに至るべし。わが國、近來離婚するものは、結婚者の數の殆ど三分の一に近しとかや。これ、君子國の体面を損するなきか。蓋し、その原因は、結婚を以て、單に、財寶容貌若しくは家政の業務を、機械的に執るを以て足れりとする如き、外部の欲望を滿すを目的として、露ばかりも、内部の愛情を起して、偕老同穴の覺悟なきに由るならん。

眞に、愛情を以て、夫婦間の要義とせんか。一旦夫婦たる以上は、たとひ、その境遇、清貧洗ふがごとくならんも、容貌非類の醜ならんも、將た、病臥家事に堪へざるも、互に意とせざるべし。否悲運に陷るに從ひて、いよ〳〵深さを加ふるものは、夫婦間の愛情ならん。まことや、愛情だに深からんか。貧も憂とならす、醜も感せざるべく、病のごときは、反りてあはれの種となるべし。況んや、身高閣玉樓に住み、學識あり、名望ありて、疾病さへなき分限を有するものにして、純潔なる夫婦の愛情を懷かんか。その樂いふべからず。されど、世の肉欲を目的とするものは、いまだ、愛情の眞味を享くる能はざるべし。愛情は精神より出づ。精神以外に愛情を求むるは、木に由りて魚を求むる類なり。

なほ、兄弟間の愛情も、樂しきものなり、切なるものなり。おもふに、始終兄弟同居せば、親しさのあまりに乘して、口論なとするに至らんも、一朝居所を異にするか、亦死別する如き塲合に、始めて、兄弟の愛情深さを知るべし。三草集に、

埋火のあたりのとかに兄弟の
　まとゐせしよそこひしかりけり

新拾遺集に、

おもへたゞつらねし枝の朽はてゝ

頼むかげなくなれるなげきを

との詠歌あり。これらを見るも、人情として、兄弟をおもはざるものはなし。されど、教育以て、兄弟の愛情を強く養成せざるときは、必ず、他の情欲その勢を逞しくして、以て、兄弟間の愛情を制抑するに至るべし。所謂、兄弟牆にせめぐ非倫を生ずるは、世の常なり。凡そ、世の兄弟相爭ふものを見るに、家督相續の爭、家資分配の爭に基因せざるもの殆ど稀なり。されど、若し、愛情強からんか。反りて、かゝる欲望を制抑し、互に利得を讓る美徳を現すに至るべし。

子女の教育上に於ける力

岸田　松二郎

儼然たる家風の下に人となりたる婦女子は、常に尊長を敬重し、已を持すること恭儉なるの習慣を、歳月の久しき間に陶造せられて、既に、其の性の如くになるが故に、言を以て教へず、行を以て化せずと雖も、時々物々、皆な道徳上の規矩に適ひ、知らず識らず舅姑良夫の愛情を買ふことを得るが故に、啻に、婦女自からの幸福なるのみにあらず、亦以て、婚家の家風を繼承し、之が改良をなすを得るが故に、其の福祉を増進すべきこと明かなり。男子に在りても、亦、勤勉端莊の習慣を養成せられて、常に、其の心を持すること堅固に、其の事を執ること愼重にして、敢て、暴慢鄙吝の心を生ずることなく、而かも、事業着々として成効を見るに至るべし。蓋、教育の力は、至大至重なるものなりと雖も、一身を圍繞せる森羅萬象の事物に觸接して、之がために、其の力を減殺せらるゝこと幾何なるを知らず。彼の香薰馥郁た

る室內に入るに、其の始めは、極めて之を臭知すと雖も、暫時にして、之を感せざるに至る所以のものは、是亦、習慣之をして然らしむればなり。古來、其の心を正うし、其の身を修めんとするものは、耳に淫聲を聽かず、目に惡色を見ざるは、外物の不正を防遏して、以て、其內を正道に傾かしめんとの方法なり。然るに、一朝門戶を出れば人の耳目に入り來りて、其の心を刺激すべきものは、到處に開展せらるゝがため、能く之を驅逐して入らざらしめんとするは、其の心內の素養堅固なるものにあらざるよりは、焉ぞ之を防ぐを得んや。抑人は、內自ら其の心を修め、外以て之を助けて、能く其の心を正うするを得るなり。之を以て、學校敎育如何に能く薰染すと雖も、庬雜汚穢の室家に在りて日に漸し時に漬することあらば、則ち、善良の萌芽を枯凋せしめて、全く、醜汚の心を生長せしめ、善德の半を損殤し其の効果を尠からしむること、火を睹るより瞭なり。若、夫室家の風儀端嚴にして、苟くも、惡念の起るべきものなくんば、則ち、習其の性となり、內外相應することを得べし。

養蜂業と蜂蜜（五）

近藤　隆

第七、蜂蜜諸種の用途

蜂蜜は、麵包若しくはビスケットと共に、直接に食料に用ゐるの外、麵包師が精良なる食品を製造するに當りては、常に用ゐる處なり。蓋し、蜂蜜を菓子に混用すれば、菓子の品質を保存するの利益あり。又、一旦乾燥したる時は、暫らく麵麭罐中に密閉すれば、再び新鮮なるに至らん。

蜂蜜は、又、製藥に用ゐられ、且、咳嗽劑の主藥

たり。之れ全く、砂糖に比して遙かに衛生上の効あるに因らずんばあらず。

普通、世間に所謂蜂蜜製食品調理法は、多くは、是れ有れども、無きに如かざる有害無益とも云ふべきものに屬す。これ、其等は、妄りに種々雜多のものを調合するが故に、其の結果は、單に悪品たるを得るに過ぎざればなり。只、以下に記する調理法は、最良なるものとして保證する處なり。

第七、蜂蜜調理法

ハネージヤム、麪粉ニクオート（一升二合二勺）、溶解したる豚脂三匙、蜜四分の三パイント（一パイントは我三合一勺許）、糖蜜四分の一パイント、鳶色砂糖山盛二匙、重曹一匙、鹽一匙、水三分一パイント、バニラ精半匙より作れるもの。

ハネージヤンブルス、麪粉二クオート、溶解豚脂三匙、蜂蜜一パイント、單舍利別一パイント重曹一匙半、鹽一小匙、水三分一パイント、バニラ精半匙より作れるもの。

右に示するジヤム及びジヤンブルの二品は、普く、麪麭師及糖菓商の用ゐる製法なり。合衆國ウイスコンシン州のみにても、此の製造の爲め、毎年十噸の蜂蜜を要すと云ふ。

ハネーケーク、又はクツキース、フレザー氏曰く、此の製法は、砂糖及單舍利別を全く用ゐる事なし。即ち、蜂蜜二杯（通常コップ）バタ一杯、混和したる鷄卵四個、スキム乳一杯を交せ之に量り能く一クオートの麪粉と重曹一匙とを加ふ。尚薄ければ、麪粉を加ふべし。通常の砂糖製菓子の如く、薄からざるを要す。故に、余は、常に濃厚なる蜂蜜を用ふ。宜しく注意して分量を計るには、必ず、同一のコップを用ゐ、蜜、鷄卵、バタの三をよく混合せざるべからず。而して、此の混和したる原料

を、容易に燒け得る樣に、火勢の緩き爐にて燒くべし。

又た、料理としては、右の外麪紛を多く用ゐべきなり。然らば、別に板面に輾さゞるも、よく擴かるべし。もし香氣を欲すれば、之を調合するも可なり。余は、毎例橙皮を用ふ。之れ實に風味よき黃餅を作るに足ると。

他のハネーケーク、麪紛六封度、蜂蜜三封度、砂糖一封度半、バタ一封度半、鷄卵六ケ、重曹半オンス、薑適宜を原料とし先づ麪紛を鍋又は木盤に入れ、眞中を凹ましめ、バタと砂糖とを能く捏ね合して、凹みに入れ、次に蜜と鷄卵の黃蛋とを混和して、之に加へ、手にて捏ね交せるべし。此の捏ね合する際には、沸騰水に溶解したる半オンス許の重曹を、少時を隔てゝ、折々注入すべし。以上を混交して、薑を加へ、最後に鷄卵の白蛋を併せ、一種の滑かなる生麪をなすに至る迄で攪混すべし。

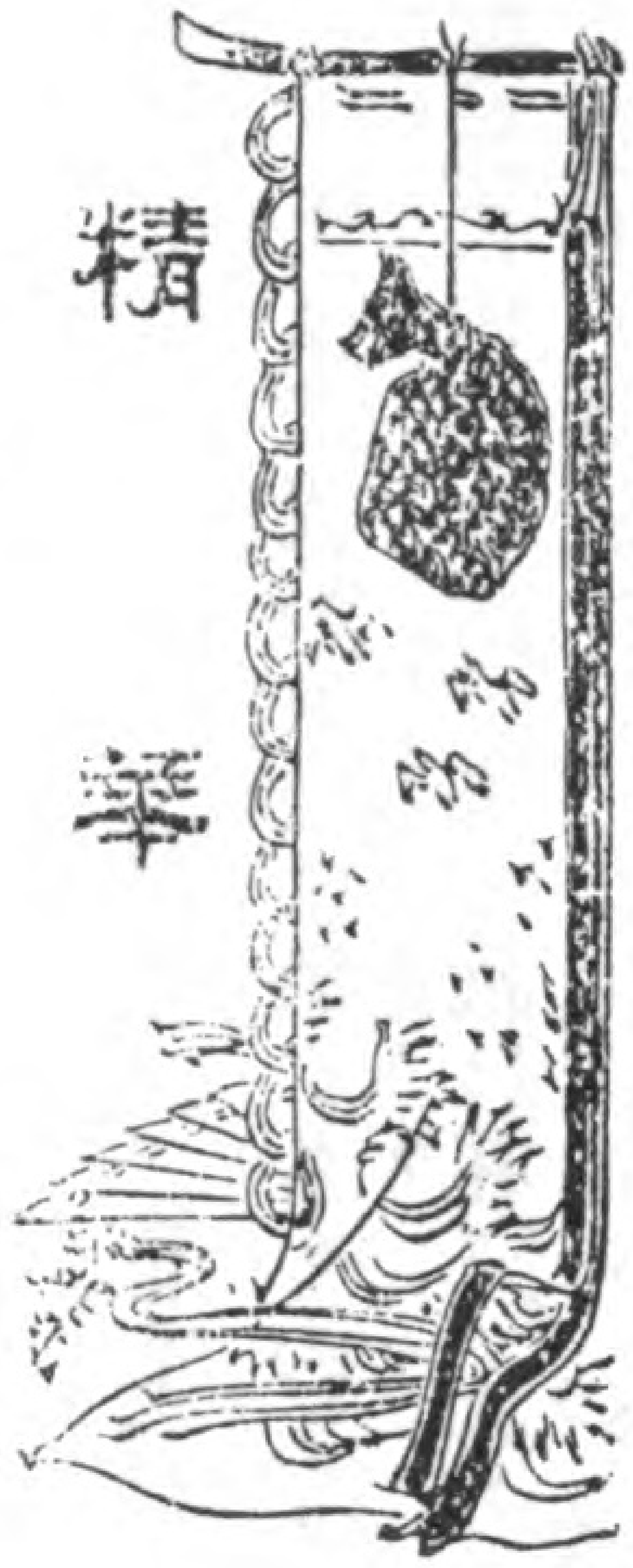
既に生麪となれば、之を七等部に分割し、薑餅の如く打ち延ばして、普通の鍋に入れ、刀を以て其上面を半吋の長さ宛の片に切り、火勢の鈍き爐中にて一時間燒くべし。但し、能く燒きて焦さぬ樣に注意すべし。

燒き上ぐれば、菓子の表皮として其の頭に砂糖を掛け、各側面をして觸れしめざる樣合紙を入れ、木盤又は陶器中に入れ、かたく蓋を以て掩ひ、冷くして乾燥せる室内に置くべし。而して、之を用ゐるには、少くとも三ケ月の經過を要す。

蜂蜜製菓子は、砂糖若しくは單舍利別を以て製造したる物と異なり。永く放置するに從ひ、其の品質佳良となり、且つ蜜の香氣を進むるものなり。

（以上イー、ディーハウエル氏の記述に係る）

以上記する處は、只、養蜂の一般と蜂蜜の性質及應用の梗概に止れり。余は、他日を期し、養蜂の手續、其の他に關する記述を爲して、讀者の趣味を得ん事を望むや切なり。（完）



勅語要義（承前）

東久世通禧謹述

謹みて按ずるに、赫々たる神州固有の大道は、其の根元、天に出で、決して、儒佛、及、他教學等に準據せるものにあらざること、古史識する所、明瞭炳燿たり。廣瀬社緣起に曰はく、「吾朝者、天孫降臨已來、自二上一人一、至二下萬民一、神孫也。故守二神國之遺法一。遂不レ嘗二外國之儒教一、而經二千五百年一」と。是、上古淳朴の形情を云へるものにして、皇祖皇宗の遺訓人に存することとあるを見るべし。玉海に曰はく「我朝之習、以二伊勢事一爲レ本」と。是、皇祖、天壤無窮の勅を垂れ、同殿共床の義を示させ給ひしより以來、君臣父子の大倫、甚明なるを以て、國體の尊嚴と、祭祀の禮典と、自離るべからざること、祖宗の遺訓によるものなるを說き示せるなり。亦以て、遺訓の、人に存するものあるを見るべし。其の他類例甚多し。是に由りて、之を觀れば、斯の道は、其の厚き所、自然に出で、彼の昊天といひ、眞如といひ、天帝といふが如き、人爲の假想にあらず。故に、天地

開闢の初より、皇祖皇宗の躬行せさせ給へる事、吾等祖先の實踐せる跡、即、この道にして、道と事とは、もと、一致同體なり。故に、先忠孝の實ありて、而る後に、忠孝の名あり。又、其の名を美にして、其の實なきが如きにあらざるなり。

我が邦、中古以來、文學文章、支那より資る。忠孝の字は、彼の用ゐる所なり。而して、其の說、亦、大に、我が大道に類するものあるを以て、道義の出づる所、亦、彼に在りとし、我に固有の道德の存在せざるを疑ふ者あり。抑、我が大道は、支那の敎義とは、相類似せる所多けれども、已に、其の根本を異にせり。我が國は、開闢以來、萬世一系の　天皇を奉戴するを以て、主義とし、一切の道德、皆、之を根據とすれども、彼は、易姓革命を常とし、自然、人民を主

とせり。故に、其の本源に於て、君主主義と、民主主義との大差あるなり。是、最、識別を要する所なり。而して、我が大道は、神聖完美にして、今古一貫し、人倫の標準、毫も、缺點あることなきは、國史の上に、炳燿たり、抑、國史は、　祖宗、明訓を垂示せさせ給ひ、歷代の　皇上、之を承繼せさせ給ひ、臣民、之に遵由して、規範を、永遠無窮に遺せる經典にして、固より、奪略爭鬪、不義不德を以て充たされたる歷史と、同一視すべきものにあらざるなり。是、實に萬邦無比にして、神州に特有せる所のものなり。此の神聖なる國史の經典あり。豈、亦、他の經典を求むるを要せんや。

忠僕市兵衛が妻

田島利三郎

上總國市原郡姉崎村の百姓次郎兵衛といふものゝ下人に、市兵衛といふがありけり。其の妻、名を何とかいひけむ。たゞ、姉崎の女武士といへる渾名のみ世に傳はれり。むかしの百姓の、其のまた下人づれの女房の、いかなれど、女武士などいふ不相應しからぬ名を止めけむぞと、うち聞けば、いと怪訝しかれど其の由緒を知るにおよびては、眞の武士も心はづかしき殊勝なる心操の、けに、女武士とうたはれて誠の名を忘られけむも、なかなかに、ゆかしき行狀なりけりや。今にてこそ聞くも物珍しけれ。その頃、猪鹿のたぐひ里方にいでばびこりて、姉崎村の田畑は、其等のために少からぬ損害をうけたりければ、元祿何年といふに村人相談ひて、惣兵衛といふ狩人をたのみ、玉なき鐵砲をうたせて、其の害を防ぎしが、いかなる事よりか、小石などの入りたりけむ、九右衛門といふものゝ妻を殺しけり。その事、官にきこえて、惣兵衛は、遂に死罪に行はれぬ。次郎兵衛も、はじめ、糺問はれし時、不圖せしあやまちのと、可憐がりて、隱蔽しゝことの罪となりて、其の身は遠島に處せられ、田畑家財は悉く沒官せられぬ。

下人市兵衛は、主人のなりゆきを深くなげき、ひたすら、赦免のこと訴へしかど、かなはざりければ、まづとて、わびしながらも住家をつくり、田畑をかり耕して、主人の老ひたる父と、萬五郎といへる稚き人を養ひいたはり、さて、間がな隙がな、官におもむきて、主人の罪の赦されむことなげくこと十餘年におよびぬ。官にても、其のふる

まひを甚あはれがりて、萬五郎成人の後は、父の罪によりて追放せらるべきに定められたりしをゆるし、其の上に、次郎兵衛が持傳へたる田畑宅地は、すべて、市兵衛にかへし與ふることゝせり。もとより主人の田畑宅地を、おのれ領せむ理由なし。主家へ是非にと再三歎願しければ、更にいと奇特なりとて、半は彼の萬五郎に返與へ、餘を市兵衛に得さすことゝして、やう〳〵納得せしめけり。表面こそあれ。實は田畑宅地の収入皆、主家のものとしてさゝげいれぬ。これより、奉養生活の艱難を免がれければ、もつぱら、主人赦免のことに心を盡しけり、遂に志を達せずして死去りしといへど、忠僕の名上下に聞えわたり、身分がらにも似ぬ尊敬と幸福とをうけて、一生を終たりしは、あはれ、誰が内助ぞ。

市兵衛の妻、即ち、彼の姉崎の女武士は、渾名にも表示されたるごとく、百姓の妻としては、否、まことに武士の妻としても、比類多からぬばかり婦徳を備へたりき。主人の厄にかゝりしより、夫を勵しては赦免のことにつとめしめ、老幼の主人をして、憂き中にも憂を忘れしむるばかりに、いたはりかしづきて夫の心をやすからしめ、耕耘縫濯内顧の患なからしめ、而かも、すべての名譽を夫にさゝげて、自己は毫も求むるところなかりき。また、男々しき渾名に似もやらず、よろづにあはれふかく、すなほにしてしとやかなると、到底、下々の分際の人にあらず、然るべき家の姫君などにやとあやしまるゝばかりなりきとぞ。彼の渾名も、おそらくは、百姓のごとくはあらで、武士の家の人のごとしと言ひけるを、いつしか武士と武士とのみ言ひならひ、遂には、あらぬ女の字を冠らせて、勇々しき名よびつたふる様になりしならむ

といへるものもあり。或は然らむか。など或もの
はものがたりぬ。



女禮

家政

婚禮式（承前）

有住常子

嫁の土産披露の樣

是は、目錄にて披露したりき。通の者、右の手に大高檀紙一重にて調じたる竪目錄の中程を取て、直にもちて、左手は膝の上にそとつけて、進める時、嫁の介副立て進み、向合うて居り、通の者、直に持ちたるまゝ中禮を互になし、さて、左の手大指を手前にして、目錄の中より下の方をもち、右の手大指を向にして、夫より下の方をもち、左手を向より前にめぐらしながら、目錄の頭の左にある樣にして、進みて、婿の介副に渡す。婿の介副進みて、一禮互にありて後受取りて、進みて婿の前に居り、左明大指を上にして上の方にずらし、中程をもち、右手上の端につけて、向に是も大指を上につけてめぐらして、守頭を我方にして、直にもち、謹みてうつむきて、右手の大指を向より折目にいれて、左手にて左に開き、右手にて皆開きて、下に置て、婿君の方へ、直に見給ふやうに進め、すこし左右の手を膝頭につけて退き、厚く禮するとき、嫁も禮をなし、婿君もそと禮したりき。介副進みて目錄の端の方をとりて、前に引寄せて、

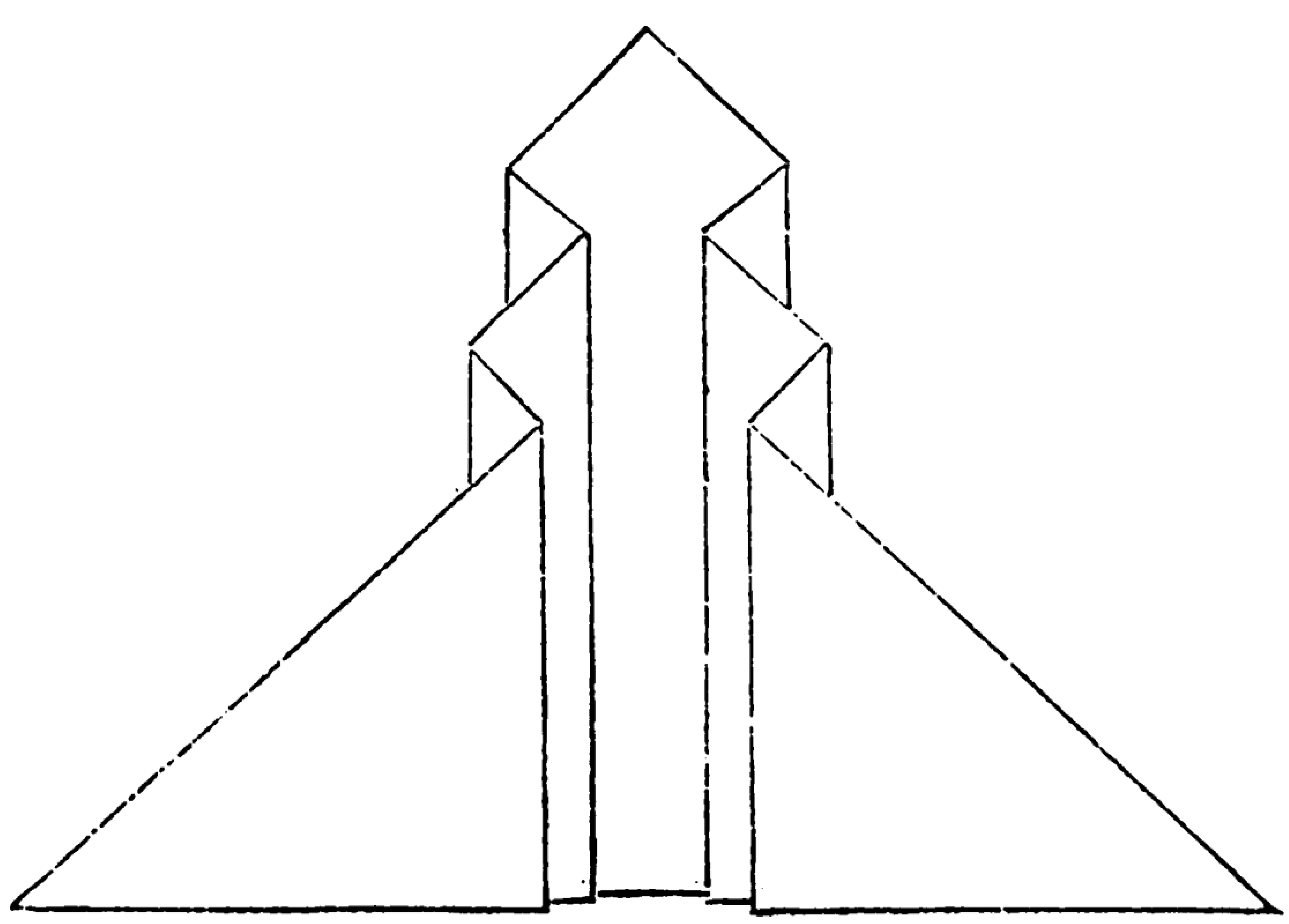
右よりたゝみ、左よりたゝみをさめて、左手に中をもち、右手に右をもちながら、手前をめぐらして、持出たりしやうになし、右膝を引て、爪立、左膝を引て爪立、下座をむくやうに、下座の膝を浮かして廻立て退きたるとき、先の通進みて受取、次の間へ退きゝ。

折方

龜甲角蝶高立

有住くわう子

小さき三方様の物に付くるなり



茶の湯

茶禮初學（承前）

孤峯庵祿仙齋不羨

關　葦雄

本年本月五日發兌、本鑑第貳百貳拾號家政欄內、大福の式祝詞に換へ掲示せしが、其の文中へ飾り道庫二重棚二種の圖式を挿入せしは、編輯の際、誤入りし者にて、王服の式には、毫も關係無レ之事也。

依て爰に其の棚の點前仕法の事を筆敍せん。棚の圖式は前號貳百二十號を熟覽ありて、會得せられん事を請ひ願ひ升。

飾道庫

解釋、不羨曰、大目點と云ふは、如二刺圖一右の方へ水指を寄せて運び置合す。兩器（但し、兩器とは毎度云ふ茶入茶椀を云ふ）。即ち、棚の眞中を二個に割りて置合す。茶を點る時は、身體は臺目に座すべし。（但し、炉緣の左の外角を、眞の目當にして座すべし）柄杓を引くも、此の見當あり。茶入茶筌置合も、棚の眞中二つ割あり。偖又、此の飾道庫は、四疊半、台目兩種の點前施行し得らるゝ所、發明人の考案に富みたる處、賞翫せずんばあらず。總飾の跡は、必、飾りを換へて、不レ同樣工風すべし。將、水指を始終置付て遣ふも、一種の扱なり。平素稽古の上にては、是等三種の類を見合、道具の取合に因りて、交々なすべし。「其の時は、一遍毎に藥鑵を持出して、水を差足すべし。

二重棚

○註解、不羨曰、此の棚も、小棚あり。刺圖は、總飾を示したる所あり。總飾にても、水差無レ之が、飾道庫に類似して居升。又、水指を置付にすると云ふ事も有升。點前は四疊半、乃ち小棚の扱あり。飾換の種類四通り有レ之、左に記す。

先、第一中棚に茶入一個

次に、天井柄杓蓋置斗。(但八の字)

次に、天井同じく中棚に茶入。

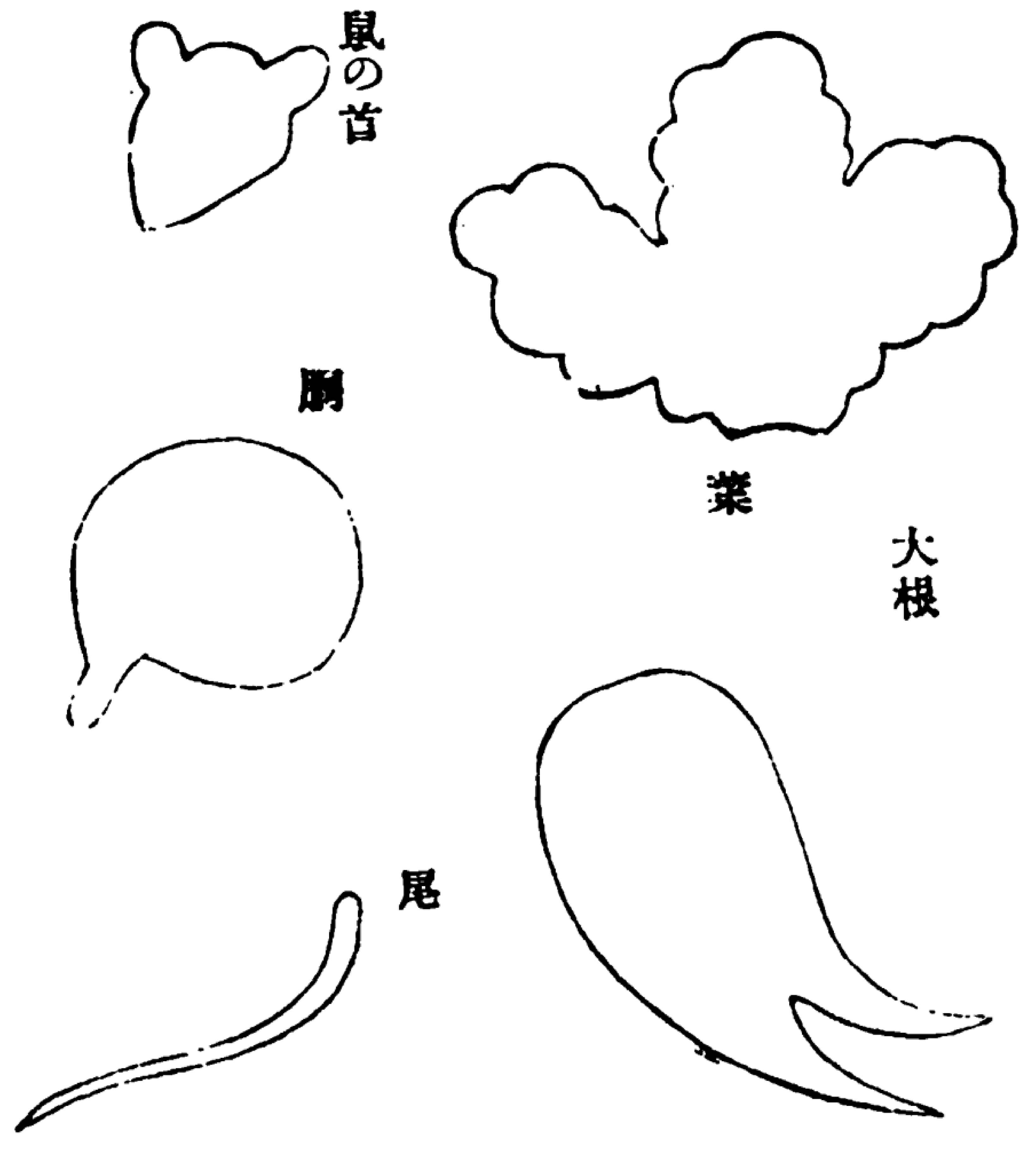
次に、總飾天井同じく中棚に茶入、茶椀、尤、茶椀は仕籠。(但し中に茶巾茶筌緣に茶杓)水指の有無は、都べて關係する故、逸々不レ記。都て、棚ものと云ふものは、永指を置付けて、不レ運方、生質主義あるものあり。然るを、反對して水指を運ぶと云ふも、特旨にて、大々的一興あり。

たちぬひ

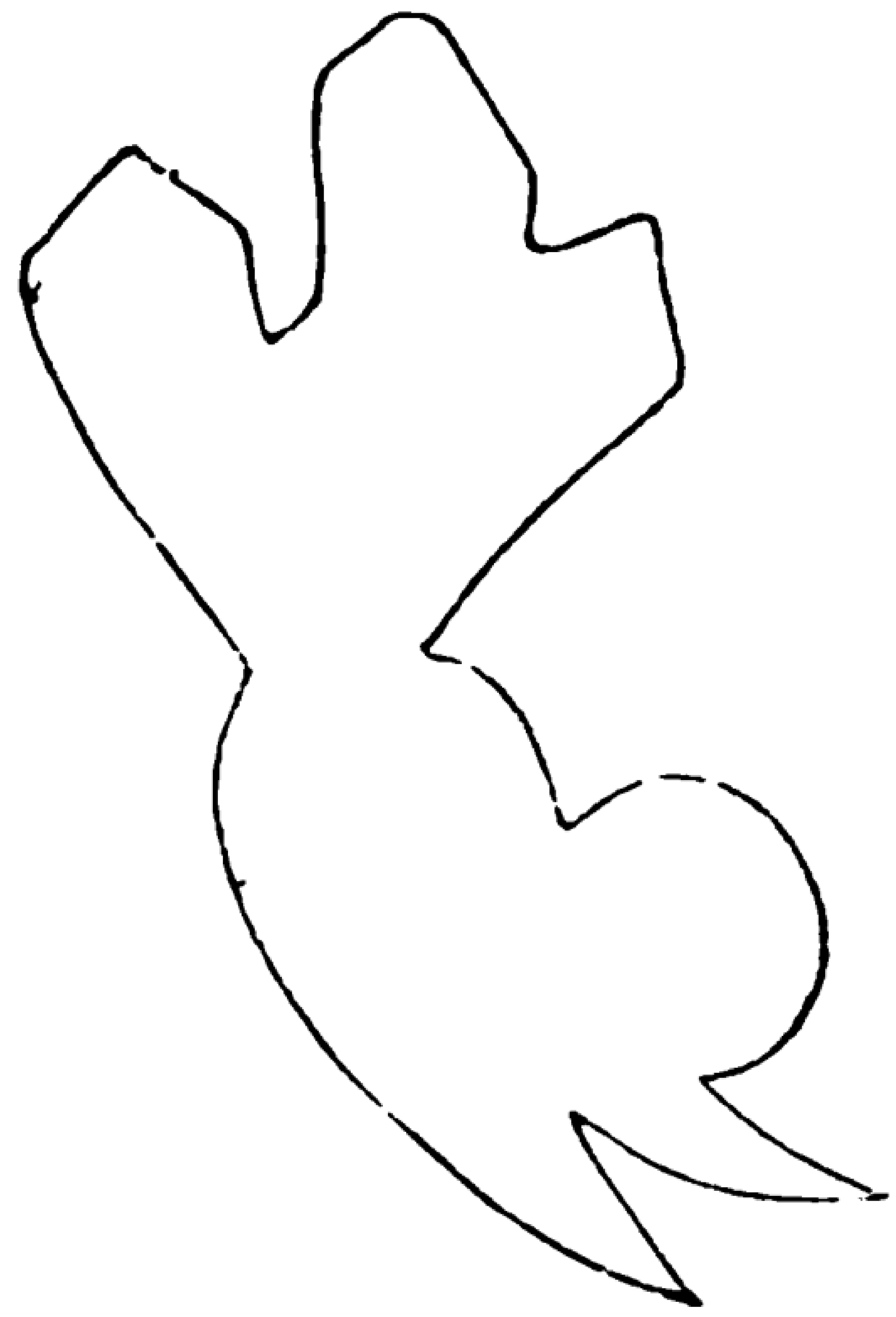
匂ひ袋

甲子

西山たい子

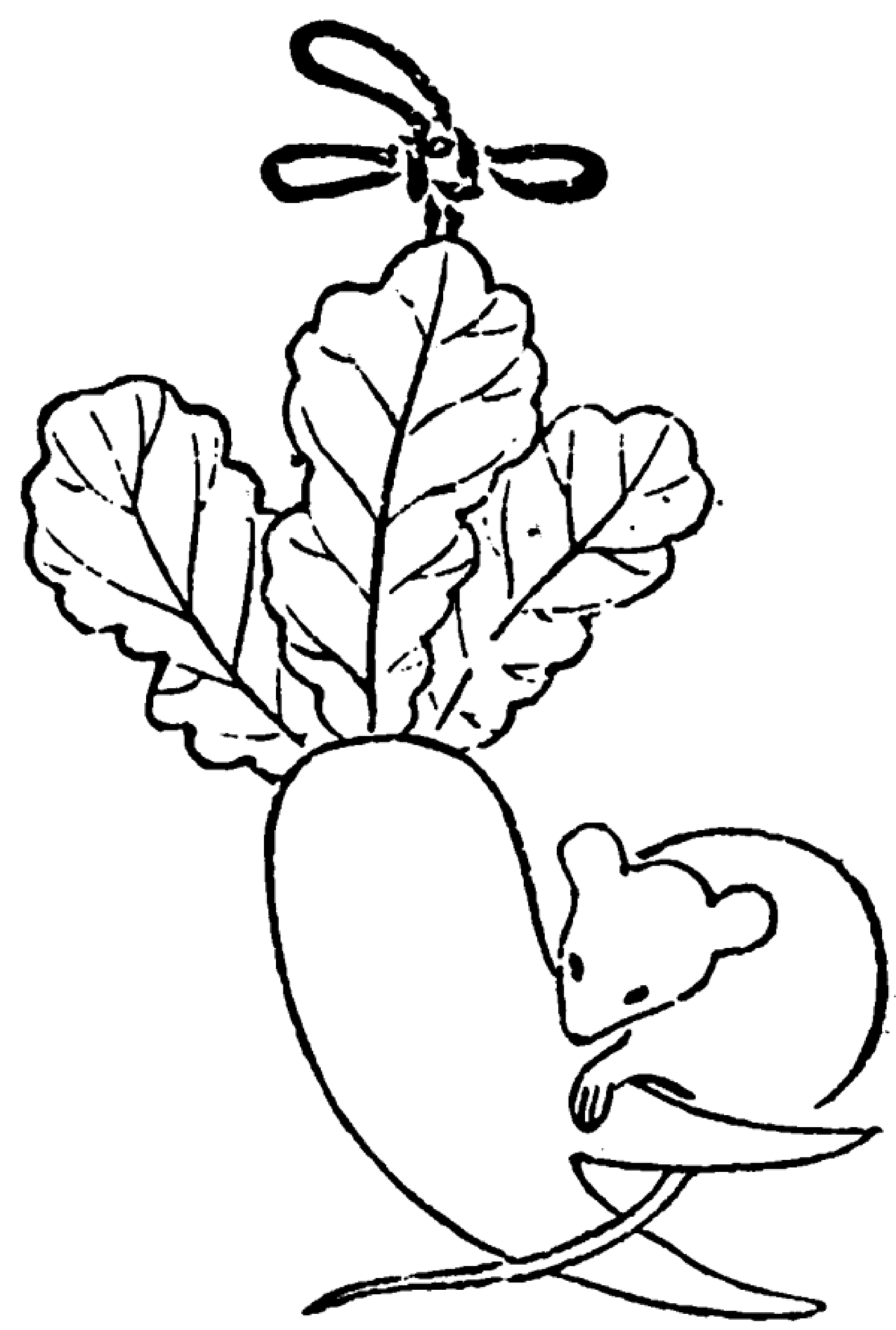


右の圖の如く厚紙を斷ち、葉には綿を入れず、青き切をベタリとはりつけ、之れに、くきのすぢを畫きおくべし。大根には、綿をあつく入れて太く見ゆるやうにし、白き切れを被せるべし。鼠の首と胴には、よろしき程に綿を入れ、鼠色の切を被せ、目鼻、爪等を畫き、左の圖の如く組み合せ、



裏をも例の通り厚紙にて上圖の如くたち、綿を入れ、切を被せ、例の如く紐を通しおきて、裏表を合すべし。又尾には綿を入れず、黑き切をはりても、はらずして、厚紙のまゝ黑くぬりおきてよろし。それを、大根の股の間にはさみてはりつくる等左の圖を見合し玉へや。

その圖



だいどころ

琥珀鷄卵

先、厚さ二寸位の箱に鹽をいれ、其の上に鷄卵をのせ、上より押して、鷄卵形にくぼみをつくり置き、鷄卵を、割りていれ、暫時置き、鷄卵の少し堅くなりたる時、鷄卵の上に鹽を覆ひ、一夜漬置き、翌朝鹽を拂ひ見れば、鷄卵の蛋白は鹽にしみ

つき、蛋黄のみ琥珀の如くかたまりをるものなり。程よき鹽加減にて、よきものなり。

松風慈姑

慈姑の皮を去り、山葵卸にておろし、白玉粉を能くすりつぶし、おろしたる慈姑と交せ合せ、蒲鉾の如く、板に五分程に薄め付け、蒸籠にて蒸し、蒸しあがりたる時、蒸籠よりいだし、冷し置き、金網に、能くおこりたる火をのせ、灰を吹きて、前の蒸たる慈姑の上にかざして、焼目を付け、あつきうちに照をひき、けしの實をいりて、ふりかくるなり。照の製り方は、味淋の煮きりに、醬油を加へ、鹽梅し、煮つめたるものなり。

吉野煮

鷄肉を能くたゝき、よき程にまるめて、メリケン粉をまぶし、胡麻油にてあげたるを、味淋醬油に、煮出しを加へ、鹽梅し、煮込みて、椀に盛り、摺生姜を添へて出すべし。



國文學講義

井上頼文

紫式部日記（七）

しめやかなる夕暮に、宰相の君と、ふたり、物語してゐたるに、殿の三位の君、すだれのつまひきあげてゐ給ふ。

としのほどよりは、いと、おとなしく、心にくきさまして「人は、なほ、こゝろばへこそ、かたきものなめれ」など、世の物がたり、しめ〳〵としておはするけはひ、「をさなし」と、人のあなづりきこゆるこそ、あしけれと、はづかしげに見ゆ。

うちとけぬ程にて、「おはかるのべに」と、うちずんじて、たち給ひにしさまこそ、ものがたりに、はめたるをとこの、こゝちし侍りしか。かばかりのことの、うちおもひ出でらるゝもあり。

そのをりは、をかしきことの、すぎぬれば、わするゝもあるは、いかなるぞ。

〇釈義

〇宰相の君　中宮に奉仕せる女房の呼名あり。本名はつまびらかならず。

〇殿の三位の君　御堂の關白道長公の長男、三位頼通卿のことあり。童名を、たつ君といひ、右衛門督より、權中納言、大納言、左大將に累進し、次で、内大臣となり、遂に、攝政太政大臣にいたる。承保元年二月二日薨ず。年八十三。或は八十九ともいへり。世に、宇治殿とも、宇治の關白ともいふ。さて、殿の字の上に、扶本、傍本、釋本、村本等に、との、うち、の五字あれど、今、類從本、田本、岸本、一本等によりて削りつ。

〇すだれのつま　簾の端の方の、彼方と、此方と、相對へる所をいふ。

〇としのほどよりは　まだ若き年齢のドアヒヨリハの意あり。頼通卿は正暦三年誕生と大系圖に見えたるに依て推せば、今年、即ち、寛弘五年は十七歳にあたれり。

〇おはかるのべに　古今集、秋の部に、題しらず、小野の良材

をみなへしおほかる野邊にやどりせは
　あやなくあたの名をやたちなん

と、あり。此の歌の一句を口ずさまれしなり。その意はかゝる女房たちの居る處に長座せば、

思ひもかけぬ浮名を世間に立てられもやせんとあり

○うちずんじて　打誦じあり。うちは詞を強めんために添へたることばあり。

○釋解

もの靜に、シンミりとしたる夕がたに、式部は、宰相の君といふ女房と、二人にて、談話をして居たるに、殿（道長公）の長男三位（頼通）の君が、簾の端の方を引きあげて居たまふ。そのヤウスは、年齢の割合よりは、大層大人らしく、誠に、奥ゆかしき樣子にて、いはるゝには、昔の人は、品定めあどする時に、すがたかたちの、うつくしきよりは、心がけの、よろしき者が、一番善しといへり。實に、そのことばの通りで、人は、ヤッパリ心がけの善いものが、一番わりにくい

あど、浮世の話をシンミりとして御座す御ヤウスが大人めきたり。このやうに、大人しくおはす、今日の有りさまを見ては、いまゝで、年がお若いゆゑ、萬事ヲボコイと、女房たちの侮りたる方が、よろしからぬのであると、思はるゝにつけても、まだ幼稚ありとて輕蔑したる、女房たちの、あさはかなる心イキが知れて、ミツトモナク、耻しく見ゆることかあ。だんだん世間ばあしに實が入つて、女房どもの馴々しくならぬヨイ加減の時分に、をみあへしおほかる野邊にやどりせむ

おやあくあたの名をやたちあんと、くちずさみて、ヤヲラ立たせたまひし、その樣子は、昔のつくり物語あどに譽めてある、よい男は、即ち、この三位の君のやうにキノキイタ

人ならんと思ふ、心もちが致しましたわい。このやうな、チヨツトシタ事も、あと〳〵より、思ひ出さるゝ事もあり。また、其の折には面白き事と感心したる事も、其時が過ぎ去れば、影も形もなく、忘れてシマウ事もあるは、そも〳〵如何なるわけがらのもののものなるぞ。人の心は、げに、あやしいものではある。

漢文學講義

佐々木天游

長野清字子潤說　尾藤二洲

清者水之德也。弗ㇾ清則失二其爲一ㇾ水。水而失二其爲一ㇾ水所三以取二濯ㇾ足之悔一也。然徒善不ㇾ足二以爲一ㇾ政。潤不ㇾ及ㇾ物、雖ㇾ清亦何益。易云。潤二萬物一莫ㇾ潤ㇾ於ㇾ水。夫唯有ㇾ所ㇾ潤。而後水之德可ㇾ言。潤之德大矣哉。鄕人長野清。問二字於一ㇾ余。余因表以二子潤一。

清は水の德なり。清ならざれば、則ち、其の水たるを失ふ。水にして、而て其の水たるを失ふ。足を濯ふの悔を取所以なり。然れども、徒善は以て政をなすに足らず。潤物に及ばざれば、清なりと雖も、亦何の益かあらん。易に云ふ。萬物を潤ほすは水より潤すはなし。夫唯潤す所ありて、而て後水の德言ふべし。潤の德大なるかな。鄕人長野清字を余に問ふ。余因て表するに子潤を以てす。

長野清と申ます人が、尾藤二洲先生に向つて、ドウカ私に字を（字と申しますことに附いては、禮記に子生三月父親名ㇾ之。既冠而字ㇾ之とありまして、子が生れまして、三月めに、父が其の名を附けます、是が名で、サウシテ、其の子が成人して、元服を致します時に初めて字と謂ふものを附けます。サウシテ、名と字とを附くる所以に付

いては、名ハ形体ヲ正シ、心意ヲ定ムル所以ナリ。字ハ仁義ヲ崇ヒ、長幼ヲ叙ル所以ナリと謂ふ、ムヅカシキ理屈がありますけれども、是は漢土の風俗で、日本にては、穴堅に、此の道理に倹りて名を附け、字をつけると限りたものでは、無様に思はれますが、先一ト通りは、右の様な仔細のものであります。）一トつ附けてくださいと願ひました時に、先生が、「子潤と謂ふ字を御附になりまして、サウシテ。其の子潤と字を附られました仔細を、解説されましたのが、即ち此の文で、長野猶、字は子潤の説、説は、文体中の一式でありまして、矢張解説の義でありまして、論文と別段に甚しき相違は御座りませぬ。經書歴史などに基きて、更に自分の見識を佐け、加へ詳に明に、條理を解説するを以て、上乗と致すのであります。偖、清者で、清く澄みきつて居ると謂ふものは、

水の性徳で、水の美徳ヂヤ（徳と申ますことが、一ト口に分ります様には申上悪く、御座りまして、一体、單に徳と申しますと、正韻にも、凡レ言フ徳者。善美正大。光明純懿之称也とありまして、心の善美純懿ある所を名けて申しました者で、又、事や行やも、矢張同じことで、善美正大、光明なることは、推並べて徳と名けます。乃心徳とか、道徳とか、徳行とか申す様な場合であります。併し、此所の徳の字は、俗語の性徳と謂ふ程の意と心得べし。）ソコデ、もしも、水が性徳の清むと謂ふ美徳を失うて、濁りて澄みませぬで、あつたらば、（則は接語辭にして、コレナレバ、又はコウアツタナラバの意なり。弗レ清カラ則は、澄ぬでアツタナラバの意。）水の水たる所以を失うて、無くすると謂ふものであります。水の大事は清と謂ふ性徳の美を失うて居るものでありますから、水で

あつて、水でなき様なものであります。ソコデ、濁水であつて、其の水たる所以の性徳を失うて、濁りて澄ぬから、終には、是は濁水だから、纓（冠のひも）を濯ふワケにはイカヌから、足を濯へと謂うて、泥足を濯れる様な、輕蔑の侮を招き取るワケヤイになるのでヂヤ（孟子の離婁上に、有孺子歌曰、滄浪之水清兮、可以濯我纓、滄浪之水濁兮、可以濯我足云々とあり。濯足之侮と申しますことは、是に本づいて謂ふたものでありま す、然しながら、（然は轉語の辭にて、水の徳は清であるから、澄まねばならぬ。シカシナガラ、唯澄だ計りではと、上文を轉ずるの氣味あり。）徒善で。但空しく善の心計ありても、其の行がなければ、以て政を天下になすには不足して仕方のなきものである。（孟子離婁上に曰、徒善不足以為政徒法不能以自行と。註に、朱子云、徒猶空也。有其心無其政。是謂徒善 あり。善心のみありて、其行事なきを、徒善と謂ふ。徒とは、空しきことなり。）ソコデそれと同じことで、唯澄むで清と謂ふ、水の性徳の美のみありても、物を潤すと謂ふ所の潤徳が、萬物に及むで、行渡らなかつたなは、タトヘ清く澄めりとイフタモノ、是亦何の益かあらんで、何の益にもたゝぬ。潤すと謂ふ、水の功用があるから、水の徳が廣大になるので、イクラ澄でも、物を潤さなければ、何の益にも立ぬことになりて、但清き計りの、徒清で、一向仕方がない。易といふ書物に申してありますことは、萬物のヨロヅノモノを潤し涵すものは、水より潤すはなしで、何よりも蚊よりも、水が一番の物を潤するのであります（易經説卦傳の辭なり）と箇様に易傳にも、申してありますが、夫マア、唯物を潤すと謂ふ所の功用がありた所で、初めて、

其の澤が、物に及ぶものだから、水と謂ふもの丶徳が、顯れてくるので、物を潤した所で、而後ソウシタノチに、水の性徳の美と謂ふものが可レ言取立て、申すことが出來るので、潤した所で、水の水たる所以の徳が、生きてくるので、徒水でなくて、眞實の水と謂ふことが言はる丶。シテミルト潤すと謂ふ所の功用の徳と申すものは、誠に大きなものじや。(大矣哉矣哉は、歎語の辭にて、語をシッカリト引しめて結ぶ内に、咏嘆の意を帶びたる詞にして大矣哉ナントシタ、廣大なものヂヤ。と謂ふ意あり。)潤すと謂ふ徳がありた所で、初めて、水が功用のある生た水になるので、潤の徳は廣大なものぞや。ソコデ、水は清く澄ねばならぬが、但澄だ計りでは、何の益にも立ぬ。必ず物を潤すの、潤と謂ふことがながらねばならぬ。(是迄が、長野清に「子潤と謂ふ字を附けた所以の說で、鄉人以下は、叙事の體であります。)ソコデ、長野清に。子潤と謂ふ字を附たのは、カウイフワケデあるが、鄉人の自分と同鄉人の、長野清と申すものが、問二字於余一デ、ドウヅ私に、字を一トつ附てクダサイと、願ひましたから、余自分が、ソレニヨリテ、表し名づくるに、子潤と謂ふ字を以てしたのでありますと、叙事を以て、却て玆文を結びましものであります。

和畫通信講義（第五回）

山崎彩俄

淡墨にて、器皿花果葉枝と畫き、後、果蒂葉脈花心を、濃墨にて描き入るべし。果實は、極めて淡き墨にて、半程まで隈を入れ、水にてぼかし、乾きて後、通常の淡墨にて、點を打ち入る丶なり。

又、彩色にて畫くには、最初、淡墨にて、器皿を畫き、後、淡き赭墨にて、實を畫き、濃き墨にて、蔕をつけ、黄勝ちの青色の極淡きを、蔕の方より塗り、水にてぼかし、其のうるほへる内に、淡き胡粉を點じ、次に、猩臙脂にて、點を打つなり。もし、乾きたる時は、汚氣なき筆にて、水を塗り置き、程を見はからひて、打ち入るゝなり。葉は通常の濃墨にて畫き、表は青色を、裏は、黄勝ちの青色、或は少許の岱赭を和して塗り、乾きて後葉脈を入るべし。枝は濃き墨、又は、赭墨を挾墨になして、畫くなり。花は、淡墨、又は、赭墨にて畫き、後筆に胡粉を含め、先へ紅色を附けて、隈を入るゝなり。すべて、花は、開きし花より、蕾は、色の濃き方よろしく、花瓣の間、花心の處に、黄勝ちの青色を點するは、花蕊の透き見ゆるこゝろなり。花蕊は、墨、猩臙脂、岱赭、いづれにてもよし。これらは、皆乾きて後、花粉の道分に黄色を塗るなり。又例の如く、花蕊を、胡粉にて畫き、後、胡粉を雌黄にてとき、花粉の點を打ちてよし。雌蕊は、黄勝ちの青色にて畫くなり。



漫録

女訓綾廼雛形（巻之〇承前）

楫取素彦

素禮の事

一顔もち仰のきたるは無禮なり。伏目になりたるも見ぐるし、差對ひたる人の胸のあたりより、少し低く目をつくべし。貴人は勿論等輩たりとも、むざと面を見まじきなり。手は、袖くゝみにして、なるたけ、さし出さぬがよし。貴人の御前にては、膝よりおろして脇へつきてゐるべし。並々の所ならば、膝の上におきてくるしからず。

一貴人へ御禮申様は、披露の人に從ひ、四尺ばかり跡より、しづかに參り、御目通りの三の間に參らば、そと、下にかしこまるべし。都で、下に居るにむづと膝をつくべからず。落ち居さまに左のひざを落付け、さて、右のひさをつくべし、披露の人こなたへと申され候はゞ、進みて二の間へ入り拜すべし。進みやうは、膝行にて參るべし。手をつきなから、左のひざをいさゝかうかめて進め、さて右のひざをうかめて進め、左と右と、互に進むる三ひざ程にて然るべし。若、あひ遠くは、なは二ひざばかり進みてかしこまり、頭は、疊より三寸計に俯して、手は、膝よりいさゝか前に出し腕の内面を向にし、指先を手前へむく樣にして、頭をさげ拜すべし。女子は、男のやうにひれ伏に及はず、此の定にてよし。貴人こなたへ近くと仰あらは、二ひさ程進

みて拜し申べし。さて、二ひざはかり退りて披露の方へ、いさゝかねぢむき、御目賜り御意蒙りしかたじけなさを申べし。女子は、たゞ、そと默禮したるばかりにてよし。元の通り、三の間へすべり出て、一拜して起つべし。たつ時、披露の方へ向く様に、片ひざをひきて、筋違さまにあるとき、下かたのひざを起してたてば、御前をうしろにせぬ様に起るゝなり。

但、女子は男子の樣に、まはり膝の業を爲る業なきものなれば、本文の如くして、少しねぢむきたる体にて、膝を起すべく、披露人は、大體、わが右方にあるなれば、右のひざをおとへ下げ、左もともにねぢむく樣にしてさて、右のつまさきをはたらかして立てば、裾をふまへず、御前のかたもまうしろにならぬと、左ひざよりたてば、懐中の品抔もすべり出ずして、便りよろしけれども、披露の人左方にあるときは、左へ向はねばならぬときは、その心して、左ひざより起つべきなり。都て、左右へ開き起つわざは、此のたらきによろしきなり。

惣して、立居振舞の樣體は、業にて示さねば解しにくきものなり。この定に振舞事は、稽古の勞をつみて、よく錬熟したるうへならでは、思ふ樣にあるまじ。晴の場にのぞみて仕そこねては散々の事なり。またしき程の人は、左の略法を用ゐてよろし。

一三の間より進む時、そと腰をかゝめて起ち、二の間へ入り、二ひさはかり進みて拜終りて、二ひさ程すべりて、前に示す如く、少し筋違樣に、向きて起ち、二の間へ下がり、一禮して退くべし。

これは、より所なき故なり。から樣に振舞たらば、扣の間に下りてのち、披露の人に對ひ、進退不調

法にて畏れ入るよしを謝し申べきなり。さて、素禮といふは、右の立振舞を申也。此の趣にて、親方目上乃至等輩まで、そのほど〳〵に應じ禮儀あるべし。親方にても、凡人ならば、膝行膝退の作法に及ばぬ事也。

各國婦人の特色

三石直方

▲他の長は、資つて我が短を補ふべし。他の短は以つて、反省の料となすべし。

▲たゞ、我が長をすてゝ、他の長短をあはせろとの愚をなすべからず。

第一章　英吉利婦人（承前）

（其の三）英國婦人と家庭

情愛のために義理を沒するが如き傾あるは、日本婦人に、屢之を見る所なるが、英國婦人の如きは、寧ろ義理の情愛に打勝つ様の感を與ふることあり。之、畢竟其の幼時より、不羈獨立てふ觀念の下に養成され、勤勉忍耐を以て人となりたるによる。故に、其の家庭や、一見嚴に過ぐるが如きものあり。例へば、小兒生れて十四五ヶ月を經過すれば、寢房を別にして近づけず。四五歲に至れ共、決して、其濫求に應じて、言を與へ、溫顏を許さず、理に違ひ節を失ふ事は、直に之を詰責し、決して其の儘に捨て置かざるなり。又、其の稍長じて、他より物品を惠まれ、或は郊外に伴はれ、一日の快樂なんど與へられたる時は、兒をして其の人に謝せしめ、自個は、之に向つて一言の挨拶をもなさゞるを常とす。而も人之を怪まず兒、亦、唯々として其の命を奉ず。是等は即ち、其の兒をして獨立心を喚び起さしむる根源にして藹然たる慈母の愛は、自から其の間に溢るゝが如きものあり。之を、夫の愛兒の爲には、目も心も

暮れ、識らず、事の是を過るやうのものに比しなば、恰も、月と鼈ほどの差あるべし。左れば、母の兒に於ける此の如くなるを以て、兒の母に於けるも、亦、嚴として叨に屈從の義を守らず。若し、兒たるものゝ所見に違へる事をなさしめんとするや、假令、慈母の命と雖も、決して之を肯せず。潔く其の是非を爭ふなり。斯くて、此等の兒童が、學校時代を經過し、社會萬般の時務に其の身を委ね、各自に家をなし、夫婦の契をなすや、其の情に於ては、固より、甚だ濃なるも、情を以て理を枉げざるなり。故に、往々、其の執る所の理想と主義の如き、終身相反して融和を見ざることあり。且夫れ、東洋婦人は、概して、婦は夫に養はるゝ樣の習慣なれ共、英國婦人は當初より、多くは、自個の財產を有し、又、特種の職業を有するものあり。故に、其の家政の如きも、其の幾分の負擔に任ず。之れ、即ち、婦人の權力の大なる所以にして、男子專橫の行はれざる、亦、宜ならずや。

嘗て、南洋の一島に移住せる英國人夫妻ありき。夫は商業に、妻は通譯事務に、互に協力一致して働ける結果、巨額の貯財をなしゝが、偶、事の行違より財產爭を起し、遂に法廷に是非を訴ふるに至れり。而も、夫妻の情交は、毫も平素に異なるなく、各其の法廷の判決に從ひ、遂に微言の情交を妨ぐることなかりき。這は、單に一例に過ぎざれども、英國一般の風習は、下流よりも、中流は、中流よりも上流社會に進むに從つて、益々嚴肅なり。今日、英國民が、最も健全なる國家を組織し、富强文明の中樞となれるもの蓋、獨立敢爲の氣風を、夙に、其の家庭團欒の裡に養ひ來れるにはあらざる歟。

（其の四）英國議會と婦人

議會は、通常、午後に於て開會せられ、議員の最も多く列席し、議事の最も盛なるは、夜間九時より十時頃にして、傍聴者も、亦、此の時を以て最も夥しとす。而も、傍聴者の多數は婦人にして婦人席は、速記者席の上方に、小揩子を以て張詰められたる、ケェジ中に設けらる。婦人の種類は、主に議員其の人の妻子、姉妹、其の他の關係者にして、殊に、議員休憩所の如きは、常に婦人を以て滿たされ、一見大英國々會は、婦人の遊樂場たるの觀あり。然るに、今日、この婦人制限を實行せんとするも、數百の議員中、一人の之を賛成するものなかるべし。好し、之を賛成するも、家に歸りて、親愛なる妻孃姉妹より其の賛否の如何を問はれ、吾こそ其の賛成員の一人なれと答ふるの勇氣あるものは無かるべし、此等は、一鎖話に過ぎざれども、英國婦人が、如何に時の問題に熱心にして、亦自から、大なる社會思想を、其の間に養成しつゝある乎を知るに足らむ。

女子警醒遺音（其二）

白松園主人

いゝいゝ、紅葉の詞に、人と契らば、うすくちぎりて、末とげよ、もみぢ葉を見よ、薄きはおそく、濃きはとくちるものにて候。

之、柳里卿が紅葉に對して、人情を諷せる、規箴の語なりと知らる。うすく契れといふ言味あり。我國人が性情の弊として、初期の熱度劇烈なるに反し、第二期にはその熱度半減し、第三期に至りては全く冷却して、本の淡水に歸する

を常とす。これ、獨り、男女間の關係のみに非ず、學問事業に於ても、皆此くの如く、其の熱心の向上する時は、勢ひ當るべからざるも、頓に挫折して、全く別人の如くなり果て、終を全うする者甚だ稀なり。之を食物にたとふるに、味の甘美なる者は、却りて飽き易きが如く、情の初めより、濃厚に過ぐる者は、その反動もまた速にして、永久に持續する者、殆どなし。秋山萬林の紅葉に比して、うすきは遲く、濃きは疾しといへる、實に詩人の眼に映じ來る、好個の比喩といふべし。

女はみめの美しきが寵せられて、心の正しきを愛する人はまれに、物は形のめでたきを好みて、意のおもしろきを取る人は少し。ある家の妻は美人の聞えあれども、妬心ふかくして、夫の放埒なるをいきどほりつゝ、常に爭論絶えざりしが、ある時、妬みの餘り、夫の留守に縊れ死にたり。夫も大酒のために吐血して身まかりぬ。妻の名を春といひ、夫の名を福太郎とよべり。人は名よりも行にあり。松竹に千年をいはひ、鶴龜によろづ代を比したりとも、家を治むるは和合にあり、長生は養生にありとしるべし。

いづれの世を問はず、人情の赴くところは、いつも歎息の至りと知らる。當今の世の如き、吾人は實に、性善か性惡か、迷はざるを得ず。政界の上流に立ち、天下民衆の摸範たるべき人にして、色に溺れ酒に醉ひながら、英雄色を好むと呼び、常操なし、八方美人なりなど云はれても、却りて人の及ばぬ處なりと思ひ、社會は金力と、權謀の外には、何物もある事なし。道德は愚人の守る處にして、智者の字書になし。或は天下の公盜と呼ばれ、或は大臣と呼ばる

るも、蛙の面に水はどとも思はず、揚々得々として、天下の大道を濶歩する者、雨後の竹の子よりも多く出づれど、世人見て怪しまず。政事家たる者は方に此の如くなるべし。實に彼は政界の豪傑なりと欽羨するに至る。此實に社會の罪なり。社會一般の腐敗なり。社會道德の衰へたるなり。此の如き人物を仰いで、上流に昂々然たらしむる者、社會の罪に非ずして何ぞ。いかでか、政事家としていさゝかの手腕あればとて、亂行狼籍をするをよしとせんや。日月の蝕の如しと、先哲の戒めたる如く、今日社會道德の腐敗は下流社會に非ずして、上流人士すべて社會を混濁にするなり。吾人は世の識見ある婦人たちに一言す。明治の女子諸君よ。今日の男子には、此の如き非道非行、粗狂亂暴の人非人甚だ多し。僥倖にして社會の制裁にうち勝ちて、一時の暴逆を逞しうするものありとも、此の如き人に伴はれず。此の如き者の妻たるを耻ぢ、此の如き野夫に弄ばれざるやうに、凛乎たる婦人の美操特節を發揚決行せられん事を。此の如きは獨り、日本婦人の美擧たるのみならず、實に婦人の國家に對する孤忠といふべし。之れ柳里卿氏が云はれたる如く、女は容色の美なるが寵せられ、外形のめでたきを好みて、その心性意匠を取る人なく、婦人を以て翫弄物に比せんとする者、當時に於て尤も多かり。豈に義憤を勃發し、此の逆域を脱せずして可ならんや。奮ひてよ。日本國の心ある女子たちよ。

（次號續出）

辛丑の御代

山岡螢雪

玉かづら、懸まくもかしこしや。　神武天皇の初めて、敷島の大和の國、橿原の宮に即位ましましたる、辛酉の歳正月をもて、我が國紀元元年と定め給ひて、今茲、明治三十四年に至るまで、年を經る寔に、二千五百六十又一年間。神武天皇の四十一年を始めまつり、綾に畏き、今上天皇陛下の、明けき大御代の今年に至る、辛丑のめぐりめぐりて、實に、四十と餘り三回の多さにぞ至りける。

あはれ、其の御代々々に起りたる、御事蹟の一端をしらべ奉り、併て、天皇の御略傳をも記しまつらんは、あながち、徒事にもあらず、やがて、幼き媛たちの、國史を學び玉ふ材料にもやと、蛇足のそしりは兎に角、老婆心もて、序でながら、東西兩洋に起りし出來事も、極めて簡單に、書き添ふることゝはなしぬ。

（一）　紀元四十一年

申しまつるも、畏きことながら、我が國第一代の帝、神武天皇は、御幼名を、狹野と申し、後、若御毛沼尊と稱へ、彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊の第四の御子にまし〳〵て、御母は、玉依姫と申し奉り、庚申の歳、降誕し給ひて、御年十五におはします時、立て皇太子となり、五十五歳の御時、住なれ給ひける、日向を出でまして、御東遷の後は、今の大和の國高市郡、橿原に皇居を奠め、茲に、即位の大典を擧げさせ玉ひて、萬邦無比なる天壤無疆の、皇基をひらき、御在位七十六年、御壽一百三十七にましますゝ、丙子の歳三月神去り給ひたれば、今の高市郡白橿村大字洞なる、畝傍山東北

の御陵に葬り、神倭磐余彦天皇と、稱へ奉れり。

此の御代の四十一年は、仍ち辛丑の歳に當りけれども、何事も古書に傳らねば、記し奉らん事更になけれど、異邦にては、彼の宋の成公の卒したる、東周の襄王三十二年にして、西洋紀元前六百二十年、即ち、五年毎に行はるゝ希臘の大祭、オリンピアの第四十回目に當り、又、有名なるドラコの法典の、出でたる年なりと云へり。

（二）紀元百一年

人皇第二代綏靖天皇は、神武天皇第四の皇子にして、御母は、媛蹈鞴五十鈴姫皇后にまし〳〵、紀元四十二年の正月、立て皇太子となり、父帝の登遐遊されし後は、日夜悲悼し居給ふのみにて、庶政は都て、庶兄、手研耳命の爲し玉ふ儘となれど、空位なること三年、庚辰の歳正月、御位に即かせられ、事代主神の少女、五十鈴依姫命を立て、皇后とし給ひ、皇居を今の大和の國、葛上郡葛城に定めさせ、高丘宮と號け玉ふ、御在位三十三年、御壽八十四におはします、壬子の歳五月かくれさせ給ひたれば、癸丑の歳十一月、高市郡白檮村大字四條なる、桃花鳥田丘上の御陵に葬り、神渟名川耳天皇と稱へ奉れり。

天皇の二十二年は、實に辛丑に當れど、古史の傳ふるなく、唐土にては、東周の靈王十二年にして、晋が三軍を復したる時にて、西紀前五百六十年、即ち、有名なる平民黨の首領、パイシストラトスが、貴族黨に勝ちて、政權を奪ひ、立てアテンの僭主となり、寛大の政を施したりし年に當れり。

（三）紀元百六十一年

人皇第三代、安寧天皇は、御在位三十八年おはしませど、此の御代には、辛丑に當れる歳なく、次の帝第四代、懿徳天皇の十一年こそ、第三回

目の辛丑なれ。
天皇は、先帝の第二の皇子にまし〳〵、御母は、渟名底仲媛皇后と申し奉り、御年十六の時、立て皇太子となり、辛卯の歳二月、御位に即かせ給ひ、息石耳命の女、天豐津媛を立て皇后とし、皇居を高市郡輕境岡に定めさせ、之を曲峽宮と號け玉ふ。御在位三十四年御壽七十七におはします、甲子の歳九月崩去し給ひたれば、今の白樫村大字池尻なる、畝傍山の南、纖砂谿上の御陵に葬り、大倭日子耜友天皇と稱へ奉れり。
此の年こそ、三聖の一人とたゝへらるゝ、孔夫子が魯の大司寇となりたる、敬王の二十年にして、耶蘇紀元前五百年、即ち、彼の有名なる、波斯戰爭の起原にして、イオニア種族の希臘人は、波斯に反して兵を擧げ、サアーデスを攻めて、其の市府を燒き、又、カーセージ人は、西班牙に勝ちたる年なりと云ふ。

斧のえ（十）

松竹莊主人寄贈
荒木田麗女遺稿

あるじは、ことに心ゆきて、おはし〳〵すゝめまゐらすとて、何よけんなげいふべき御さかなもなくてといへば、中將、いで、そのとばりと帳のまうけこそあらまほしうと、はゝゑみ給ふ。そは、御心にこそは、むかしなりせばふたつの道をもうたひ侍りぬべきをと、さすがに、さしすぎたり。かく聞えそめてしのちは、たえず、けしきばみて思ひわかしのなどいふを、なまけやけしと君はおぼす。さしも、世はなれ心ふかき住家にて、にはかにあさればみすきありかんもにげなく、うひ〳〵し

うてやすらはれ給ふ。あるじは、心もとなううちなげくめり。しめやかなるひるづかに、あなたより、撫子のとく咲たる花をもちて、おほきやかなるわらは來て、あるじに、是は、臺の御前にさき侍るを、今朝御らんじいでゝをらせたまひ、まらうどに奉らせ給へとてなん、うへのまゐらせたまふると申。すやがて、とりて奉るとて、あるじ、草かくれ咲ける撫子露おもみしをれてぞふす見る人なしにとかきてむすびつけたり。君、すき〳〵しうもと見たまへと、思ふらん心もあはれにて、

撫子の草のかきねをたづねても露うちはらひわれこそは見めとのたまふを、あるじ、うれしと思ひたり。君は、つきなきことゝ、しばしねんじ給へど、日比になれば、つれ〳〵もなぐさめがたくてありつる撫子をよすがに、御文、時々つかはし給ふ。かへりごとのおほどかに、手など上手めかしきを、思ひのほかにもありけりと心にく〳〵て、せちに、ゆかしうおぼえ給へば、あるじにも、いかに〳〵とせめ給ひ、たはふれにくゝもあるかなとて、なぞこえがたきと。あながちにいられかましきを、おかしうもいとをしうも見奉りて、我も、かつ〳〵いそぐなりけり。この比は、しけうあなたにもゆきかよふ君は、日にふたゝび三たびと文かき給ふ。母君ぞ、花心におはすると聞て、いとあやうく、こゝにおはします日かずもかぎりあなれば、あいなき物おもひひきいでんがうきことゝてをさ〳〵うけひかずときこゆるを、君口をしうて、あるじを、まめやかにうらみ給ふ。わりなのことやとわぶめれど、もとより、おのがこゝろあることあれば、ついにしたがひ奉る。かゝるところはこと〳〵しき作法などあべきならねど、さすがに、こたいなる心は物のはじめとて、こといみしつゝ、

日ついでなどえりいでて、おはしますべくさだめつ。その日は、ひるより、あるじもあなたにゆきたり。待うけ奉らんの心にや。ゆふつけて文つかはす。

若竹にかくる契は今夜よりかぞへんちよの末ぞはるけき、松はまことになどれいのことあり。暮ぬればいで給ふ。御よそひ、ことにひきつくろひ、心けさうもこよなく、おどろ〳〵しきまでにははしそへたまへり。二月十日あまりの月いみしうはれて、木の間の光をかしきに、日比すみたまふ山を下りて、岩ねつたひに、たみたる道をわけ入りたまへば、谷の水音かすかにきこえて、村鳥の聲は、ねぐらにしづまり、梢に鳥ぞはつかにうちなきたる。何となう心ぼそくて、まづ、故郷の空こひしく、雲井をかけれど、似つかはしからずにすさみたまひ、かう、すゞろにまどひありくことのあやしう、しらぬ世界まで、かゝることのやまざりけりと、のちのそしりも、さすがにはづかしう、よしや、いみじき道にいでたつとも、せちに思ひきこゆる人を見奉らましかば、などの物うさかあらん。いとうれしかりなんと、まづ、わすれがたく心にかゝりたまふ。かしこにおはしつきて見給へば、山がたかけて、いとひろらかに家居ひゞしく玉こがねもてみがきなし、庭のたゞずまひ、草樹の枝さし、世にめづらしうみやびふかう、しつらひなしたり。上臈たつ女房、かうしはなちていれ奉る。内は、ことさらにみがきとゝのへたる、いみじうらう〳〵しく、都にてつくりみがきたる家といへど、かゝらましやはと、めもあやにてはしたなき心ちしたまへど、さまよくうちふるまひていり給ふ。女君、夜めにはさやかならねど、手あたりのやはらかにたをやき、こめかしきさまは、見ま

さりしつべく思さる。むげにわかひて、つゝましげなるもうちたくて、こゝら思しわたる御心のほどをいひしらせ、ゆくさきをもたのめきこえ給ふ。あふ人からには、いとゝあやにくにて、今夜ぞ、みじか夜もうらめしくうちなけかれ給ふ。したりかほにあかしはてんは、あいきやうなしとおぼして、いそぎいで給ふとて、

心なき大山からすの聲よりやわくるつらさに我こそはなけ、女君

聲たてゝさこそはなかめ山鴉ねくらわかるゝあけばのゝ空、

かへりたまへば、すなはち、御つかひあり。父ぬし、なほこゝにありて御つかひをもてはやし、ろくかつけたり。その夜もくるればわたりたまひ、三日の夜もかたばかりなれど、もちひまゐりなどして、いといたうかしつき奉る。君はいつしかと女君をもへだてなく、ひるもわたりて見給ふに、まほにうつくしう、髪めでたく、やうだいそひやかにおかしげなる人と見えたり。にはひやかなる方は、内の大殿の君にもかよひたるをことに、むつましう想ひよそへられて、こよなうちかまさりして、おもほす夜をしへだてしておぼいたるを、あるじも、うつくしう見まゐらす。中將、ひとは、なほ、もとの家におはす。あるじのもたりけるふみなん、いと所せう、車五につみあまるばかりなり。みなからのにて、まだ世になきものなり。すべて、目なれぬ心地したまへば、めづらしうゆかしくて、此のごろは、碁うち琴ひきなどもし給はず。こと〴〵なくて見給ふ。暮がたき夏の日なれば、さすがにうみたまひ、しばしおしやり、つら杖つきて、山の方をながめいだし給ふるに、そのことゝなく物思はしう、心もかきくらすやうなれば、やがて、よりふし給へる夢

のうちに、左の大殿のうへに、ちかづきまゐりたまへる、いとうれしくて、日比、むねいたう思ひこがれぬるかたはしをきこえいで給へば、女君、うらめしげにうちそむきて、

あし垣のほかにかよへる心ともしらで幾夜かまちわたりける、とのたまふに、いとゞ心もさわぎて、

蘆垣のよしや人目のしげくともかよふ心はさはりしもせじ、といふとおぼゆるほど、た山風のふき来て簾のそよ／＼とあるにおどろき、ふとさめ給ふ。

（未完）



女子要書解題（其の四）

三浦千畝

保の部

本朝女后名字抄　一巻

この書、又貴女抄とも云ふ。著者は、巻末に『明応七年十一月九日、剔二燈花於紙窓一耕二毫於翰苑一畢云々、翰林菅』とありて、菅原氏の人なるは明かなれど、その何人なるかは、未だ考へず。

此の書、分ちて、斎宮、斎院、后宮、女院の四となし、斎宮倭姫命より、愷子内親王後嵯峨の皇女まで四十七人斎院有智子内親王嵯峨皇女より、禮子内親王後鳥羽皇女まで三十四人、后宮藤原旅子桓武后より、藤原経子伏見后まで三十一人、女院東三條院詮子円融后より、東福門院源和子後水尾中宮まで八十五人の御名をかゝげ、その下に御父の御名、斎宮斎院御任定の年月

后宮女院御撰定の月日等を註せられたり。按ずるに巻末に翰林萱とあるを、この書の著者とすれば、明應以後の御名は見えざるべきなるに、東福門院源和子までの御名を掲げたるは、後人の加筆ならむか。今姑く疑を存す。

本朝女鑑　十二巻

この書、淺井了意の作なり。了意は著書極めて多き人なれど、その傳は、余り詳かならざるが如し。著書等を、かれこれ、引き合せて考ふるに、寛文に盛にして、元祿に死せる人なるべし。身分は僧侶と覺しく、佛書の註釋なども多くあり。然るに武考年表には『骨董集に、元祿六年印本犬張子を引て、了意大德晩年に及んで筆力ます／＼老健なり、元祿四年寂せられしとあるを、淺井了意が事とす、しかるに、高谷柳亭翁(種彦)の説に、此時代了意といふ人二人あり、淺井了意は俗なり、今一人の了意は僧なり、ともに著述の書ありしとなん云々』とあり。

了意の著作多かる中に、敎訓を旨として書きたるものを擧ぐれば、この女鑑の外に、堪忍記孝行物語、大和二十四孝新語園等種々あり、いづれも假名文にて、平易に書下したるものにて、當時婦女子の敎訓書としてはよきものなり。實に、了意は、わが女學史には特筆大書すべき人と云ふべし。

此の書、寛文元年の刊行にて、賢明部、仁智部、節義部、貞行部、辯通部、女式の六部門に分ち、本朝婦女、凡そ九十人ばかりの傳紀と、女式十一條とを記されたり。その女式十一條は左の如し。

第一、序
第二、初て生する女子の式
第三、女工をならふべき式
第四、女に三従の道ある式

第五、婦人は四德を備へき式
第六、夫につかふる式
第七、舅姑につかふる式
第八、人を召遣つかはるゝ式
第九、うはなり妬を試る式
第十、繼子をはごくむ
第十一、後家の式

本朝貞女物語　五卷

『日本名女物語に同じ。元祿八年の刊行あり。

解題は日本名女物語の條に云へり。

本朝貞女傳　五卷

黑澤弘忠の著なり。弘忠字は有德。石齋と號す。亦節香堂といへり。もと伊勢の人。家貧にして、常に縕凋縞の服を着す。故に人嘲りてウンカジヤと呼ぶ。弘忠、深くこれを憤り、一書を家に遺して江戶に來り、幕府の馬預り黑澤氏に仕ふ、時に年十四ありしと云ふ。黑澤氏其の學に志あるを嘉し、己の姓を冒さしめ、林道春に乞てその門に入らしむ。於是、弘忠日夜黽勵、學大に成る。後出でし雲州松江侯に仕ふ。

此の書卷中題して、全像本朝古今列女傳といふ。劉向が列女傳の篇目にしたがひ、后妃、夫人、孺人、婦人、婦女、妾女、妓女、處女、奇女、神女、の十門に分ち、年代によりて、凡二百十七人の事蹟を漢字にて記し、一人ごとに頌を施し、圖をあらはせり。明曆三年正月善齋序、寬文三年癸卯八月北山散人野子苞序、明曆元年八月自序、凡例、總目、および同年十一月弘正弘忠の兄、後序、南紀李全直淸後序とあり。寬文八年の上木あり。

曲亭馬琴が眼中に映ずる女性を論ず（其の十九）

白松園主人

聞く者と雖、皆園花の怨言に、同情を表せざるを得ば、半七、いかでか、之を憐と思はざらむ。即ち、初めて之れにその故を告げて後曰く、

……一旦わが妻となるとも、なほ原の末通女なるときは、御身に損なし、瑕なき珠に疵をつけず、かへさんものと思ふをもて、さて強顔はありけるなり、浮世の義理の絆には、終に結びも更がたき、縁と思ひあきらめて、われから奈良へ帰りてたべ、一チ日こゝにあらせては、わが心又一チ日安からず、飽きもあかれもせぬ人を、離別さするが信ぞかし、一生添ふと思はずば、人の妻とはなり給はじ、憚られきと思はれんもいと面なき所行なれど、聞きわき給はゞ恨みもはれなん、

誰か女子の身として、之を聞きさくる者のあるべき。馬琴は、此の半七を玉成せんとして、却つて、没人情の、不思議の男子となさんとせり。即ち、私情の為めに、一の節婦を犠牲に供せんとせり。無情の人といふべし。園花の答へいとかなし。

事の故を知らせ給ふに、いかでかあしう聞き侍らむ、宣ふ事は事ごとに、ことわりならぬよしもなし、わが身ありては御こゝろの、安からぬと宣はすれば、秋にもあはで憂き匪の、奈良へ帰らんと思へども、死なずは夫の家を出でじと、母にいひつる言の葉の、露もまだ乾ぬそのはしに、われから飽いて帰りしと、云はれうものか、いひもせじ、われより先に、ゆひなづけし、人の生死を知るまでは、他し妻は娶るとも、ひとつ枕には睡らじと、誓ひ給ひしその信を半わが身に察るならば、妾側室で果つるとも、さぞな嬉しく侍りなん、そなうらやましと思ふ程、おき所なきはこの身なり、情ぞかし慈悲ぞかし、衾の紙蚊帳の外、せめて後方に夜をあかさせ、人めばかりは妻と喚び、夫といはせて給はれかし、心はけふより尼法師、かるべきものを梓弓、そるまで宿の案山子ぞとみそなはせ給ひねといひかけて、泣く女児より、泣かじと袖を噛み締むる、亮隔越に数涙が、苦しき義理と恩愛に、婿と女

見が誠心を、聞きて忍ぶに忍ばれず、一聲漏す咳に、けはひする人ありと見て、半七も園花も、俄に形を改むれど、落つる涙と泣顔を紛らすべくはなかりき。

園花が性格を描くこと、優に哀れにして、眞に深閨に成長れる、妙齢婦人の面影を髣髴せしむ。半七が義を守らんとして義に外れ、いかにも男らしくなき所あるに反し、園花のもの柔かに、心うるはしくして、いかに深窓の貞靜なりし美人なりしかを、聯想せしむることよ。馬琴が、此のあたりの筆致の雅馴婉曲を極むる靈腕妙筆、吾人が常に卷を撫して、欽羨する所なり。

二人は、二人の外に絶えて聞く者なしと思ひたりき。しかも此の意中の勁敵として、尤もその聞かれんことを忌み、尤もその悟られんことを畏るゝ、園花の母敷浪が、障子越に始終の樣子を聞かんとは、かけても思はざりき。敷浪は果して、娘に對する此の憤怨を、いかにして處せんとするか。必ずや畢生の勇を鼓して、一大波瀾を湧起せんとするべし。見物は、まさに此の敷浪の上にあらむかいかに、先づ讀者の瞑想に任せん。

斯る處に半六は、奈良より退き來て、半七夫婦及び敷浪と圓座したりけるが、半六、半七に向ひて曰く、今日俄の仰事あり。郎君吉稚丸質弱多病にして、已に廿才に近けれども、猶處女の如し。故に老臣協議の結果、大殿の許諾を得て、繁花の地に保養せしむる事に決しぬ。もとより、潛にものする事なれば、從者は只三人と定められぬ。老人には心を置かるゝなれば、近臣の物なれたる、今市全八郎、布施蝶九郎と、汝との三人に定められたり。しか心得よと命を傳へ、さて敷浪に向ひて、半七は、此の秋の季までは洛にあるべし。姑さへおきわが家に若き女子をひとりあらせんは、い

と心苦し。母御のこゝに來ませしてこそ幸あれ。けふより、園花を奈良へ伴ひて、半七が歸るまで預りたまはれかし、といふに、敷浪は今聞きつる事もあれば、こは便なしとおもへども、女兒をこゝにおきては、いよ〳〵心元なければ之を諾し、今日ゐて歸るはなは早し。半七が出立を見送らせて後にすべしと答へぬ。かくて四五日を經て、吉稚華洛へ旅立ければ、半七は園花に別を告げ、父と舅姑とに身の暇をまをして立ち出でぬ。殘る園花が心やいかに。馬琴、例によつて、之れを評する文字の、盤上 珠玉の觀あるを見るべし。

同餅、布施今市等もろともに、主君の轎に引きそうて、若葉がきわき立出たり、時は卯月の中ごろにて、星まばらなる黎明に、雲間を過ぐる杜鵑、歸るにしかじと鳴くといへば、園花が身に思ひあはせて、名殘をしさ本意なさに、血を吐くばかりぞ歎きせる。

（以下次號）

柿屋餘談

赤松景福

○ね「某所へ」「誰へ」かやうのへを、今も猶え とかけるもの、世間往々あるやうなり。舊藩の時、偶「某樣へ」と認めて、差出るを見れば、右筆は直にえ字に改めなどしきとか。誤を以て正しきやう思ひしなり。又へとかけるものも、何意なくてありしなるべし。

かやうの所、慥にさす時は、「某所に」「誰に」、とあるべし。

○助辭なき詩。千里鶯啼。綠 映 紅。水村山郭酒旗風。南朝四百八十寺。多少樓臺烟雨中。おのれ和漢人の詩を、年ごろ見たりしに、助辭のなきもの此外少からず。王建の金殿當頭紫閣 重の詩、杜牧の李白題詩水西寺の詩、王維の廣武城邊

逢二暮春一の詩いづれも二十八字の中、一も助辭なきものなり。我歌にありては、一首の中助辭なくては、いとよみ難きわざなり。是詩と歌と、自然の別ある所以なり。

○移さまほしき事。　　　吾讃岐國の俗、佛を敬ふこと最甚し。幼童の箸取ことを知ば、朝飯食前には必ず先佛前を拜ましむ。不斷の習ひとなりて、幼心にも、佛ばかり尊きは有ずと、思へる樣なり。之が母たるものは、飯かしきて熟すれば、必ず先佛前に捧て、終年缺ることなし。夫五穀食物は、神の賜にあらずや。佛は外國の者にあらずや。佛は其生し國に飢て、幸に我國に飽るものなり。譬は我家の親を棄て、由緒なき餘所人を迎へ、これを上座に饗して、我親の賜ひし、食物を進るが如し。是ぞ本を知ぬものと云べき。ともかくも、右の佛に事る禮を移して、神前にさやうに有らまほしき事なれ。

○よたゞ　是終夜夜中などの意。古今集夏歌に、五月雨の空もとゞろに時鳥何をうしとかよたゞすくらむ、とよめる是なり。今も老人は常の語に、此よたゞといふ言をいへど、若き人はいはずなりぬ。昔いへりし言の、近頃廢れしも少からず。又昔いはざりし言の、近頃出來たるも甚多し。但し此よたゞ、下のたは濁れども遠鏡にも濁れり。常にいへるは、よたゞと清めり。

○枕詞を直に其の語とする事。　　是は古くより見えたり。萬葉十七。思ニ放逸鷹夢見感悅作歌に、安之比奇能乎底母許乃母爾とあり。是あしひきのを。直に山の事として、山の彼面此面（あなたこなたと云如し）にとよめる也。後世菅原大臣の、足引のこなたかなたに道は有れども、讀れたると同じ意なり。古今集久方の光のどけきとあるも、枕詞久方のを

直に天象の日として、（此歌第三句。春の日の日は時令の日也）日の光ののどけき續なり。又萬葉十六長歌、狹野津鳥來鳴翔經とあるは、狹野津鳥は元雉の枕なるを、直に雉としてよめる也。青丹吉を奈良、虛見津を倭と云ことゝせるも皆同例なり。萬葉十六長歌、刺竹之舍人壯裝。是刺竹之宮の舍人男もあり。

松上鶴

超舟漁耶

初日かゝりて明らけき
千代田の宮の松が枝に
君が八千代をあし鶴の
祝ふ今日こそ目出度けれ



樂園

夢の跡（ツヾキ）

しら、まつ、その

嫗は一日、我子の嫁なる實家を訪へり。あとは俄に風の凪ぎたるが如く、膝下そゞろに、淸風を生じて、初めて机の前に靜座するを得たり。茲に於て兀然として、手を拱きつゝ思にうち沈むこと、良や久し。かくては何れの時を期してか、筆意を受くるの時あるぞ。我身の將來、いと覺束なし、こゝに止りて、他に方針を轉せんか。知る人更になきを如何せん。ふるさとに歸らむか。親戚故舊に對して、面なきを如何せん、など心は麻糸

の亂れ繁くて、苦しき息も、他に漏すべきよしのなければ、文かい認めて、故郷の兄に相談はいやと、墨磨り流す折しもあれ、翁の聲として、白松と呼びぬ。

時に翁は、二階なる八疊の間に、大幅の繪絹を繰り廣げて、班女が秋扇の圖をものしをり、翁性質直なれども、學なければにや、見識に於て欠ぐる處あり、(畫も或は然らん)、家事一切を始めとし、翁が一身に關する事はすべて、嫗が意のまゝなり。

アヽ白松、(ト眼鏡越シニ見テ)側ナル山水ノ畫ヲ指ザシ、之レガ出來上ツテ井ルカラ、縮寫シテオ見セ……、ソシテ婆々ガ居ラヌマニ、早ク畫イテ見ルガヨイゾ、兎角婆々ガヤカマシク、別シテ掃除ト來テハ、狂人ノヤウダカラ、サゾウルサイ、ダラウガ、ドウモ病氣ダカラ、シカタガナイ、ワタシモ、大分云ソテ聞カセタケレド、ドウモ直ラナイ、直ラヌデハナイ、大喧嘩ニナル、家内ノ無事ヲ守ツテ、ツヒダマツテ居ルノダ、ドウカ、サウ思ツテ辛棒シテ貰イタイ。

男子として、少し不見識のやうではあるが、兎に角翁の懇切なる心だけは明瞭で、誰慰むる者もなき、折柄ありがたくて、涙がポロリと落ちた。ソコデ、御親切の段、謹んで感佩致したと禮を云つて、山水の圖を持ちて、下の室におりて、書きかけたる書簡を中止し、取りあへず、山水の圖を寫しにかゝりぬ。

嫗は出で行きしといへども、歸りし後のおそろしくて、日毎の日課たる掃除をば、かたの如く、晝までかゝつて、あえぎ〳〵なし終りし後の事なれば、指屈まり手ふるへて尤も緻密纖細を要する畫の事なれば氣のみ焦慮ちて、せん方なし、僅に一木一石を畫きしと思ふころ、車輪のおと、高く門外に聞えて、止まると思ふまもなく、門のくゞり戸荒らゝかにひき放ちて、下駄をガチャ〳〵といと忽

はしげにふみ轟かしつゝ、座敷の障子遐と開けて走け上りぬ。お早うと頭を下ぐる余の顔を見るより早く、白松さん掃除は濟みましたかと呼びぬ。嫗は翁の室に入りて、物語りする聲、いとかしまし、盗み聞くにはあらねど、ふと白松といふ語の耳に入りて、覺束なき心地するに、

ホントニ、私ガ居ラヌト、仕方ガアリマセンナ、私ガ一日居ラヌト、アノ通リノ仕末、私ガ今ニ神戸(子ノ任地)ニデモ、行カウモノナラ、ソリヤホントウニ、庭ハ野トナリ、家ハ豚小屋ニ、ナツチマフカ、知レハシマセン、アンタノヤウナ、ノロヒ、オ人ヨシデハ、何時マデ馬鹿ニシマサア子、エヽバカバカシイ。………

ヤアお早うと呼ぶは、隣家なる主人にて、今しも顔洗はんとて、楊子を咬へつゝ、井戸の側に出で來れるなり、(共同井戸)毎朝早くから感心ですな、今朝は洗濯ですか、とうち笑みて云ひぬ。ハイ相變らず、と答へぬ。此の人は、小說家として、大分名を知られたる人なり。

マア、お早うから、御洗濯で御座いますか、折角御勉強に入らつして、それでハサゾ御殘念でございませうね、何もかも、あなた御一人で、なさるやうで御座いますね、といと心苦しげにいたはり云ふは、以前の小說家の妻君なり。

ヤアお早う、と箒片手に出で來れるは、隣家の後手に住める、之れも小說家なる人の家に使はるゝ書生なり。實に朝から君は感心ですな、僕は實に驚いた、實に君の家のやうな八釜しい家には、一日もえ居ない、よく君は勉強するよ、とさも氣の毒さうに、眉のあたり、うち顰めつゝ、しばし見てをり。をりしも、はるかに白松さん〳〵と、あわたゞしく呼ぶは、問はずもしるき嫗なり。

白松サン、何ヲグヅ〳〵シテ井ナサル、サツサトナサラナイト、御飯ガ焦ゲテシマフデハ、アリマセンカ、ホントニ、ア

ナタニ物ヲサセルト、ジレツタクテ、仕方ガアリマセンヨ。

斯くて居る事、ふた月三月にして、夏ながら實に手の指は盡く皹にうちなやみぬ。故郷なる兄の許より、文は來りぬ、その時兄は廿三なりき、余は十七なりき、親なきおのれは、兄を父とたのみぬ、兄はまた、おのれの行末を父にかはりて、と思ひ入りぬ。弟の身の上、おもしろからぬを聞きしかど、さすがは兄なりき、初め聞きつる時は、さてはと目おどろかれ、心安からざりしにより、年老いて物知れる人の處に行きて、此の事如何ならんと相談せしに、その人曰く、大工若しくは鍛治の如き者にても、初めのほどは、その心志を苦ましめ、その筋骨を勞せしむる事常なり、況して畫を學ぶうへなどには、さもありぬべき事なり、苦に耐へ勞を忍びて、成功を期せよ、ゆめゆめ勤め愼みて、色にあらはし、氣に悟らるゝな、といとねんごろに、眞心こめての教訓、二ひろに余る紙にこまやかに記されたり。兄の教戒ありがたけれど、おのが志ざすわざに於て苦むには、いかばかりの事をも厭はじなれど、三月四月にして、なは少しの暇だにあるべきさまの見えねは、いつをか期せらるべき、いたづらに、光陰を消する事の口惜しさよと、うちなげく。

白松サン、(ト飯食ウベル箸ヲウチナガメ)上品ナ人ト云ウ者ハ、御飯ナンカ輕ク二膳ヨリ上ハ、食ベルモノデハアリマセン、此頃家ニ時々遊ビニ來マスル小山サンナンカハ、大抵輕ク二膳デスヨ、余リ多ク食ベマスト、山ダシト云ハレマスヨ、……ソシテ白松サン決シテ御隣リナドヘ、遊ビニ行キテハナリマセンヨ、アノ方ナドハ、余リ上品ノ人デハアリマセン、ソレハ掃除ナンカシナイカラ、キタナイ家デスヨ、ナルベク隣リノ人タチヘハ、口ヲキカナイ方ガヨイデスヨ(トハオノレノ評ヲ恐レテナリト知ラル)

云ひ得て、自ら上品なりと思へり、世にはかゝる

思ひをもてる人多からん。

ハイ火鉢の側ナ、机ノ前デ小説ナンカ、ヒ子クリ見ル身トナリサヘスレバ、一日十二日ハ斷食デモ致シマス。

と、一本皮肉の鸚鵡返しをなしぬ。

ある日寸暇を盗みて、隣家の先生に就いて、謀を問ひぬ。先生いはく、君の家の如きは、東京ひろしと雖、鉦太皷でさがすとも、とても得安からず、良禽は樹を擇んで栖むべしだ、義理勝ち世の中とはちがひ、余り人を信じすぎると馬鹿を見るよと、呟くが如くに敎へぬ。嗚呼その後いかになり行きて、今の身とはなりけむ、夢の跡はかなくて、淀みに浮ぶ泡沫の如し、今より後またいかなる夢のうき橋をかたどらむとすらむ。（をわり）

旅のらくがき

明治三十二年熊本の旅舍に於て　深山庵主人

（七）長崎と熊本　其一

熊本は、九州に於ける封建の大都府にて、長崎は九州にある我國開港五市場の一なり。一は、大平原の中に城廓を中心として起り、爲政者の奬勵と干渉の下に、人爲の發達をなし、他は、船舶寄繫の便により、狹少の海岸に極めて自然の發達を遂げたり。一は、三百年來大名の治下にありて、劃然たる階級あり。武士は天の如く貴くして、百姓町人は土塊の如く、卑し。他は天下の大町人にして、上に大名なく、武士なし、御奉行の監督を受けて、殆ど自治に近き町年寄の政治をなす。一は交通不便にして、容易に上國と聲息を通ずることも難く、武陵桃源のうち、殆ど特殊の文化を

開發せしに、他は天然の良港を控へ、朝に夕に百千の船舶を呑吐し、大阪、江戸、津輕、松前は愚か、其の當時は僅に此の一港を許されし支那和蘭の船も來り我國の文明をして始めて外國に接觸せしめたる地點たり。其の歴史を異にし、發達の方法を別にしたる熊本と長崎地は、同じ九國の西端といへども、人情と風俗にいちじるしき差異あるは、固より其の處ありとす。今試に其の風物の上より云へば、熊本は白川坪井川の二流に跨り、後ろに花岡金峯等の丘陵を負ひ、茫渺たる平原を隔て遥に、阿蘇の噴煙に對す。長崎は地域狭長、三面山に包まれ、一面は深く灣入したる海に臨み、二十余町の海水を隔て、直に稲佐を指顧す。一は街衢端正にして廣く、兩側に樹木を植ゑて、俗中おのづから雅致あり。他は街衢狭く、且つ、不規律にして高低甚だしく、只だ山に寄り海に臨むが故に、風光の佳絶は、實に嘆賞に堪へたり。一は地方の中心たるが故に、其の生産物は、主として、田舎の需用を滿たすが爲に作られ、他は、世界の互市場あれば、店舗を粉飾する百貨は、内地人よりも、寧ろ、外人の嗜好を參酌す。一は旅宿非常に多けれども、槪ね、地方人を以て顧客となし、他は、旅宿は大抵所謂船宿にして、回漕業を兼ね、廣く各地の旅人を收容す。一は學問の土地にして、學校書林多く、他は商業の市場にして書籍の如きは、實に欠乏を極む。一は外人に對し、尙は一種媢嫉の情を有すれども、他は能く融和し、共に食ひ共に遊び、萬國比隣の感を持す。熊本にありては、外國語は僅に一部學生の間に知られたれども、長崎は、本籠町船大工町一帶の通筋にある商買番頭丁稚に至る迄、英露の語を操らざる者殆どなし。一は飲食物に、其の味よりも量の多きを貴

び、他は其の量よりも、先づ味の適否を問ふ。一は料理粗惡にして、他は稍や支那化し西洋化して、濃厚の料理をなす。一言に云へば、一は田舎風にして、他は和洋漢折衷風なり。一は美服せず、又美人なし。他は、優美の装を好みて上國の風あり。一は武藝盛んにして、他は遊藝に能者あり。一は素朴剛健を喜び他は閑雅優長を好む。一は店頭に贅澤品少く、他は殆どあらゆる奢侈の需用に應ずるを得。一は牛店ありてシャモ屋なく、他はシャモ屋ありて牛店なし。飲料水は、二ッながら惡しけれども、長崎には早くより水道ありて、熊本にはなし。之を要するに、一は質素にして、他は侈奢、一は割據的にして、他は能く融和し、一は九州の中に九州にして、他は九州にある京都なり。今や、世運日に進みて、交通の便大に開け、中央奢靡の風は、殆ど全國に彌蔓せんとす。熊本の如きも既に九鐵開通以來風俗の變化驚く可きものありと云へば、向後年を經るに從ひて愈よ益其の風を助長し地方的特色は、漸くに銷磨し了るべし。之れ今日の大勢なり。

年のはじめ

螢雪子

不二の高根の初日の出
千代田の宮の老松に
輝く色のあきらけく
隈なき影のうるはしき
治まる御代をことほぎて
千島のはても高砂の
浦回の海人が苫屋にも
深山の賤がわらやにも

昨日のけしき様かへて
ひとしく飾る松と竹
引しめゆひて君が代を
祝ふ心は軒たかく

立てし御旗は新玉の
年たつ風に打靡く
影をひたして父も子も
夫も妻も兄弟も

笑ゑひて酌むや屠蘇の酒
雑煮をたらへ諸共に
君が八千代も我が代をも
いはゝぬ國こそなかりけれ
祝はぬ人こそなかるらめ
治まる御代のにひどしを

文林



都早春　東久世通禧

新らしきころもきかさり行ひとに
みやこおほ路は春めきにけり

竹雪有聲　佐々木高行

夜もすから竹のはやしに山かせの
ゆきふき拂ふおとそきこゆる

谷春氷　高崎正風

うちいてゝはおとさきつる谷川の
浪たちかへりこほるはるかな

山家早春　久我建通

山さともみやこもおなし春のきて
しつの少女は手まりつくなり

溪梅　津輕承昭

霜とけてすへりし人のあと〻めて
くたれはたにの梅さかりなり

待梅　宮地巖夫

あたらしき年を向へしあしたより
梅のはつはなまたぬ日そなき

早春柳　北郷久政

春はまた淺さはぬまにかけみえて
なひきそめたるあは柳のいと

春雪散風　坂正臣

うくひすの今まてなきし竹むらに
風ふきたちてあはゆきそふる

霞添山色　千葉胤明

大空はみとりにはれてひとむらの
かすみそのこる山まつの上に

早春雪　岩崎勝從

うくひすも春また知ぬかたおかの
あしたのはらに雪ふりにけり

雪中竹

豐としのしるしのゆきとす〻めさへ
ちよ呼はふなり園のたかむら

綠松臨池　岡部讓

すみそめし世をもしるらむもろ共に
千代ふるいけのきしの老まつ

雪中竹　井上賴文

ぬけいてしふしも操もあらはれて
ゆきに色ある千代のむら竹

新年に牛を詠て　竹尾正久

あら玉の年のひかりを保食の
神をはまつれ汝かことはいめ

雪中竹　竹尾正久

わか水をくむやつるへの竿ふれて

美とりにかへる竹のしら雪

雪中竹　森田光文

豊年のしるしの雪に打なひく
たけの園生はうきふしもなし

雪中竹　藤森彦男

九重の御はしのもとの呉竹に
ゆきの白ゆふたれかゝけゝむ

雪中竹　山岡良旗

降りつもる雪にはしはしたわめとも
をれぬは竹のみさをなるらむ

雪中竹　小西甚之助

枝鳴す風もなけれは竹の上に
千世の花ともつもる雪哉

寒夜衾　蜂須賀随子

霜こほる夜半の寒さをゆめにたに
しらてふすまのあたゝかき哉

雪中祝　鍋島榮子

豊年をいはふなるらんとなりにも
ゆき見る人のこゑそにきはふ

雪中鶯聲　前田朗子

玉たれのをすのとやまの雪の中に
なくうくひすの聲ののとけさ

島残雪　柳原愛子

千鳥なくこゑもきこえて淡路しま
はるまたさむく雪そのこれる

翫梅花　小池道子

あたらしき年のうたけも梅のはな
咲をまちてそもよほしにける

岡若菜　下田歌子

わか岡の雪まのわかなもえたれと
山かせさむみつむひともなし

巌に亀遊ふ　日野西廣子

つふて打つ子らもみえねは池の面の
いはほにむれて龜のあそへる

若菜少　保科節子

雪ませの風身にしみてはるなから
もゆる若菜のかすそすくなき

嶺上松　服部磯子

白雪のはれたるあさはおほそらに
そひえて見ゆるみねの松か枝

早春鶴　宮地小東洋子

うら〳〵とかすみ初たる大そらに
千代を歌ひてあそふ田鶴かな

雪中竹　竹尾小笹子

木にもあらす草にもあらす枝出てゝ
よにめてらるゝ竹の雪かな

雪中竹　横井勝子

うつし植ゑし園のかきねの呉竹に
樣おもしろく雪そつもれる

心のはな

井上頼文

鼠　志摩　米奥學藏

新らしくたてたる家の主人より
さきにうつれるあれ鼠かな

寄虫述懐

月やせてふく風さむしこのゆふへ
むしもうらみの聲やたつらん

筆

よの中はわかかく文字のことくにて
心のまゝにならぬなりけり

墨　武藏　髙橋眞壽美

世の中の人の心はうつろへと
ひとり變らぬ墨の色かな

同　　　　仝　武本胤雄

龍は舞ひ虎はかけらむ勢も
墨のにほひにあらはれにけり

同　　　　仝　淵泉義臣

濃き薄きけちめはあれど萬代に
墨の色こそかはらさりけれ

雪中竹　　　三河　紫雨藤森

六出紛々不耐清
上林寒竹碧琮琤
天顔喜色豊年兆
雪灑琅玕戛有聲

雜報



◉宮中の新年

◉一日祭　賢所　皇靈神殿の大三前に於ける、歳首第一の御祭典は、一日午前四時より行はせられ、式部職員御殿の御装飾を奉仕し五時三十分頃、岩倉掌典長以下出仕し、奏樂の間に、大三前を開扉し、御代拜を北條侍従奉仕したり。

◉四方拜　一日午前五時三十分より、陛下神嘉殿の南庭に出御あらせられ、天地四方、屬星を御拜あらせらるゝ嚴儀なるも、客臘より御風氣にて、御假床中にあらせらるゝを以て、行はせられざりき。

◉皇族御参賀宮内官参賀　小松宮彰仁親王、同妃、有栖川宮威仁親王、同妃、閑院宮載仁親王、同妃小松宮依仁親王、同妃、山階宮菊麿王、同妃、華頂宮博恭王、同妃、久邇宮邦彦王、同妃、梨本宮守正王、同妃幷に北白川大宮妃の各殿下には、一日午前九時三十分、二重橋御正門より、何れも御同車にて、御参内、東御車寄より、表御座所第一の間なる、侍従長候所に、御伺候相成り、徳大寺侍従長を経て、新年の御祝詞を言上し、更に、皇后宮人形の間にて、高倉典侍を、経て、同様御祝詞を申されれ、同時に田中宮内大臣、土方帝室制度調査局総裁心得、岡澤侍従武官長、香川皇后宮大夫、岩倉爵位局長、三宮式部長、戸田式部次長、長崎調度局長、齋藤内事課長、北房帝室會計審査局長、岩村御料局長、渡邊内藏頭等の各宮内高等官、同夫人は、何れも、同上の御場所に参賀したり。

◉親任官等の参賀　一日午前十時より、大山元帥、山本海軍、加藤外務、末松内務、金子司法、松田文部、林農商務、原遞信の各大臣、細川、海江田、蜂須賀、大鳥、九鬼、伊東、高島、清岡、野村、鳥尾、河村、林、田中、杉、河瀬、高崎、黒田等の各樞密顧問官、榎本子爵、板垣伯爵、野津教育總監、佐久間中部都督、伊東軍令部長、南部大審院長、内海會計検査院長、千家東京府知事、松岡行政裁判所長官、寺内参謀次長、長谷川近衛、川村第一師團長、鮫島内閣書記官長、奥田法制局長官、齋藤、中村、内田、田尻、梅、藤田等の各總務長官、石塚、重岡、改野等の各官房長、徳川(慶喜)島津公、徳川公、毛利公、近衛公、二條公、鷹司公、九條(道實)氏等は、夫人と共に、東及北御車寄より参向し、参賀帳簿に記名して、退出したり。

此の外、外國公使館員及び、各官新年式を以て定

められたる、一日二日の時刻に於て、夫れ〴〵參賀したり。

◉二日祭三日祭　二日三日とも、午前九時より、例年の如く、賢所、皇靈、神殿の大三前に、御祭典を行はせられ、岩倉掌典長以下奉仕したりと。

◉元始祭　歳首に當りて、天津日嗣の本始を祝せらるゝ元始祭は、豫ねて、御次第を仰出されたる如く、三日午前九時より、行はせられ、式部職官員、御殿の裝飾を奉仕し、九時二十分頃より、奏樂の中に、賢所、皇靈、神殿の大三前を開扉し、神饌及び、御幣物を供し、十時に至り、天皇陛下御代拜を、岩倉掌典長奉仕し、次で、皇后陛下御代拜を、吉田權掌侍、皇太子殿下御代拜を、高辻東宮侍從長、皇太子妃殿下御代拜を、中田東宮主事奉仕し、次で、彰仁親王、威仁親王、載仁親王、依仁親王、博恭王、邦彦王、守正王、の各殿下を始め奉り、先着々床の諸員即ち、田中宮內、兒玉陸軍、加藤外務、金子司法、末松內務、松田文部、林農商務、原遞信の各大臣、土方正二位、榎本從二位、伊東海軍大將、中牟田、林樞密顧問官(以上親任官)鷹司熙通、德川家達、島津忠濟、三條公美(以上公爵)鍋島直大、黑川通軌、花房義質、岡澤精、野崎貞澄、三浦安、眞木長義(以上勅一等)海軍中將相浦紀道、宮中顧問官船越衛、判事士師經典、陸軍々醫總監石黑忠悳、判事栗塚省吾、帝國大學總長菊池大麓、宮中顧問官堤正誼、宮內次官川口武定、判事首元忠、陸軍中將寺內正毅、樞密院書記官長小牧昌業、東京府知事千家尊福、海軍々醫總監實吉安純、山形縣知事關義臣、理科大學教授山川健二郎、醫科大學教授田口利美、宮中顧問官戶田氏共、海軍總務長官齋藤實(以上一等官)從二位伊達宗德、式部官木戶孝正、正四位黑田長成、正四位松平康莊、正四位佐竹義正、正四位細川護成、正五位大炊門幾麿(以上侯爵)陸軍少將別役成義、海軍機關總監渡邊忻三、海軍主計總監奈良眞志、調度局長長崎省吾、陸軍々醫監土岐頼德、陸軍少將坂井重孝、東宮侍講本居豐穎、式部官齋藤桃太郎、鐵道技師增田禮作、陸軍少將藤井包總、同業野義廣、海軍技師石黑五十二、會計檢查院部長伊藤祐敬、陸軍少將山內長人、同上田有澤、臺灣總督府法院判官水尾訓利、鐵道技師大屋權平、海軍造兵總監前田亨、判事島田正章、醫科大學教授丹波敬三、法科大學教授宮崎道三郎、判事岡村爲藏、同今村信行、同柳田直平、監獄局長久保田貫一、通商局長杉村濬、行政裁判所評定官千葉貞幹、陸軍少將今津孝則、同高木作藏、海軍少將伊集院五郎、式部官丹羽龍之助、圖書頭勝間田稔、海軍機關總監吉田公宗、陸軍少將中岡默、判事井原師義、同志方鍛、辨理公使官岡恒次郎(以上二等官)津輕承昭(以上麝香

間祗候）從三位時任爲基、正三位鍋島直彬、從三位平松時厚、從三位佐和正、從四位四條隆平、從四位三宅秀（以上錦鷄間祗候）の拜禮、宮内省奏任官、掛判任官の拜禮ありて、御幣物及び、神饌を撤し、各退出せり正午十二時より、再び開扉し、伯子男爵從二位以下、勳二等以下其他例年の如く參拜ありたり。左の人々は、病氣旅行等にて、午前の參列、御斷申上げたりと。

伊藤、九條兩大勳位、山縣元帥、大山元帥、西鄕元帥、西園寺侯山本海軍、渡邊大藏兩大臣、松方伯、井上伯、板垣伯、野津大將樺山大將、東久世、川村、副島、佐野、佐々木、佐久間、桂、田中海江田、鳥尾、河瀨、高島、野村、福岡、尾崎、細川、大島、九鬼高崎、杉、蜂須賀、清岡、伊東、岩倉、黑田の各顧問官、南部、黑木、奥、松岡、内海、東鄕、香川の各親任待遇者、二條、近衛、一條、毛利、各公爵、久我、嵯峨、德川（慶喜）淺野、長谷の各從一位谷、伊藤（祐麿）赤松、青木（周藏）大給等の帶勳一等

◉晴の御膳　鳳凰の間に出御はあらざりしも、一日三日とも、目出度、聞させられたりと承はる。

◉兩陛下御輕快

御假床中なる　兩陛下には、追々、御輕快の御樣子にて、三日頃より、御熱度も、平常に復させられたる程なりと、承はる。

◉沼津御用邸の新年

沼津御用邸に、御滯在の皇太子殿下には、元旦賢所皇靈殿宸殿の御遙拜を行はせられ、直に、兩陛下へ賀表を上らせられ、終りて、中山大夫以下各供奉員、志波靜岡縣知事及、同縣各高等官、星野市長等の祝賀を受けさせられたり。伊藤首相、西園寺議長、田中宮内大臣、德大寺待從長、香川皇后宮太夫其の他、各親任官、宮内官、外交官等の賀表は、中山太夫より、一々御披露に及びたりと。

◉東宮御所の參賀　有栖川宮、閑院宮、幷に兩妃殿下を始め奉り、各大臣、樞密顧問官、陸海軍將官將校等、各省文武官は、一日午前十時より。午後四時迄の間に參賀せり。

◉伏見宮殿下御賀表　御職務を以て、姫路に在らせらるゝ貞愛親王殿下には、一日早朝電報を以て、御詞を奉られたりと。

◉歌御會始　去る十八日午前十時宮中に於て、歌御會始を行はせられたり。御製並に詠進左の如し

雪中竹

御製

この上にいくへふりそふ雪ならむ
　たかむら高くなりまさりつゝ

皇后宮御歌

よの程のあらしはたえてくれ竹の
　雪しつかにもあくるそらかな

東宮御歌

ふりつもるまかきの竹のしら雪に
　世のさむけさを思ひこそやれ

東宮妃御歌

かきりなき君かちとせもこもるらむ
　竹のはやまにふれるはつ雪

元帥陸軍大將大勳位功二級　彰仁親王

雪にふすみかきの竹にくに民の
　うちなひく世をみそなはすらむ

海軍中將大勳位功四級　威仁親王

ゆきふかき御園のたかふこのなつは
　いかなる竹の子か生出てん

勳一等　慰子

しら雲もうつみかねてそみえにける
　竹の園生のしけりしけりて

侍從長

從一位勳一等侯爵臣　藤原朝臣實則上

くれ竹のはすゑなひきて千代の色の
　かくれぬ程につもる雪かな

宮内大臣議定官陸軍少將
　従二位勲一等子爵臣　藤原朝臣光顕上

此君の御代なかゝれとふる雪に
　ふしていのらぬときなかりけり

題者點者　樞密顧問官兼御歌所長
　正三位勲一等男爵臣　藤原朝臣正風上

しつれては又ふりつもる竹の雪
　千代のちからをためすなりけり

讀師　樞密顧問官
　正二位勲一等侯爵臣　源朝臣茂韶上

ふりつもる雪に色そふくれ竹の
　千代のすかたはおくよしそなき

宮内次官海軍主計總
　監従四位勲二等男爵臣　源朝臣武定上

御園生の千代の竹の子おひいてゝ
　春をはゆきのしたにまつかな

發聲　正三位伯爵臣　源朝臣重朝上

なか〳〵におひきやすかるなよ竹は
　降積む雪にをれむともせす

講頌　御歌所參候
　従三位子爵臣　菅原朝臣利㒵上

つもるかとみれはしつれて呉竹の
　みとりは雪にうもれさりけり

講頌　正四位子爵臣　藤原朝臣以季上

くれ竹のみとりは雪にうもるれと
　千年へぬへきかけはかくれす

奉行　御歌所參候正四位子爵臣源朝臣忠敬上

ふりつもる雪のうちにも御園生に
　千代へむ竹のいろはみえけり

講師　従四位子爵臣　藤原朝臣爲守上

雪ふかみしたゆく河のそこにのみ
　みとりをうつす岸のくれたけ

講頌　正四位男爵臣　源朝臣文仲上

むら雀わくらをしめて千代とよな
　たけのはやしに雪そつもれる

講頌　正四位男爵臣　物部連有鄕上

うきふしはうつみはてたる雪間より
　ふかくもみゆる竹のいろ哉

奉行　御歌所參候東京美術學校教授
從七位勳七等臣　忌部宿禰榲邨上

ふる雪にうつもれなからこの君の
　千代のふさをは隠れさりけり

撰歌　東京府平民　中島歌子上

雪のうちに根さしかためて若竹の
　おひいてむ年の光をそおもふ

撰歌　大阪府平民　鈕　一山上

ゆきにふす竹をおこしてあら玉の
　としほき人をいさむかへてむ

撰歌　愛知縣平民　小島新吉上

うくひすのちよの初音のそまたれける
　雪おもしろき竹のそのふに

撰歌　秋田縣平民　伊藤秀子上

年のたつあさ庭きよしくれ竹の
　千代しめなはにゆきもつもりて

○詠進歌數　去十八日、宮中に於て行はせられたる歌御會始に、皇族の御詠進、臣民の詠進に係る懷紙、竪詠草の總數　如し。

皇族御詠進	枚
懷紙	二一
竪詠草	一
計	二二
臣民泳進懷紙	
御前披講	二〇
華族附高等官	四一
女官	一六
御歌所	一五
神官職員	一一
華族女學校職員生徒	六
京都向陽員會	一七
計	一八三
臣民詠進竪詠草	
華族	四六
高等官	二三三
華族女學校生徒	六九

東京府	八九八
京都府	三三六
大阪府	二七六
神奈川縣	一五五
兵庫縣	二三七
長崎縣	二三二
新潟縣	三八五
埼玉縣	二二二
群馬縣	一六七
千葉縣	二七九
茨城縣	二三三
栃木縣	九〇
奈良縣	八三
三重縣	三九一
愛知縣	一一二三
静岡縣	二八六
山梨縣	二〇八
滋賀縣	二五四
岐阜縣	三一三
長野縣	七三〇
宮城縣	二五二
福島縣	二五六
岩手縣	一四六
青森縣	一六二
山形縣	三六六
秋田縣	二四七
福井縣	六八
石川縣	一一四
富山縣	一五一
鳥取縣	五三
島根縣	二四八
岡山縣	二八六
廣島縣	二五六
山口縣	三一八
和歌山縣	六九
徳島縣	一一三
香川縣	七九
愛媛縣	一四五
高知縣	七四
福岡縣	一九一
大分縣	一二三
佐賀縣	九六
熊本縣	二七五
宮崎縣	七一
鹿兒島縣	二〇七
沖繩縣	四七
北海道	一五九
臺灣	二八
海外	四
計	一一八四〇
外ニ	
長歌	一一
異式	三二一
期日後到着	四七
計	三七九
總計	一二三五七

◉月島丸遭難者へ御下賜金　兩陛下には、月島丸遭難の事を聞召され、去る十一日松本船長を始め、乘組船員一同へ、金千五百六十四圓を御下賜相成りたりと承る。

◉貞婦の受賞　兵庫縣多紀郡雲部村平民重助母太部垣キン（三十五）は、良人辰之助方へ嫁してより、一男子を擧げしも、辰之助死亡後、十餘年間、貞操を守りて、家計を整理し、養父に孝養を盡せしかば、去四日、服部兵庫縣知事より、左の如く褒賞ありたり。

資性溫厚行狀端正常に節約を行ひ舅に事へ孝養を盡し夫辰之助死亡後自ら代りて家事を整理し且兒童の教育に怠らず能く

貞操を守り日夜稼業勉强して遂に一反歩餘の土地を購入す多
年の行爲奇特とす仍て爲其賞金壹圓下賜候事

◎薄命なる孝女　美作眞庭郡川南村大字富尾妹尾嘉太郎の妹フジノ(十九)は、今を距ること十三年前、家道衰へて生計立たず、兩親が別れ別れと爲りし時、母マサに從がひて、父の家を立ち出でしが、此ぞ母子が流浪の首途にて、フジノが九歳の時、マサは身に纒ふたる簑を燒きて大火傷を受け、マサは其が爲め、兩眼を失ない、兩手さへ用を爲さゞる癈人となりしより、フジノの悲歎言ふ計りなく、未だ幼なき身を以て、母を劬はり、他の使ひをなし、僅かの賃錢を得て、露命を繋ぎ居たりしも、或る時は、其さへ思ふやう行かず、路頭に立ちて、人の情を乞ひたることもありといふ。さる程に、フジノも追々成長して、十四五歳となりければ、人の施を受くるを以て、最も耻づべきことゝなし、雇人となりて、母を養ない、今日に至るまで、他し心なかりしとぞ

◎師弟の情誼　前高等商業學校長矢野次郎氏は、一昨年來病痾の爲めに、鎌倉の別莊に、靜養中なるが、氏の薫陶を受けたる、高等商業學校出身の人々は、痛く心配し、度々見舞ふ處ありしが、今回、同校得業生數十人が、申合せ、金五千圓を醵して、公債に換へ、舊臘十六日成瀬隆藏、藤村義郎の二氏を總代として、矢野氏を鎌倉に見舞ひ、之を氏に贈りたりと云ふ。人情紙よりも薄き今日、師弟の情誼厚きこと此の如きは、稀に見るの例と云ふべし。

◎坑夫の娘の孝心　肥後球磨郡五木村三船タキヨ(十二)は、六歳の時、母を失ひて、今は八歳の弟と、父の三人暮しなるが、父は五木鑛山の坑夫にして、日々鑛山に通ひ行くに、タキヨは幼少の身

を以て、能く家事を辨へ、衣類の洗濯綻びの綴ぢ合はせより、食事の周旋に至るまで、一身に引き受け、父をして、不自由なからしめ、殊に三十一年よりは、尋常小學校に通ひ、弟の入學以來は、又弟を勞はりて、伴ひ行き、精勵一日も怠らず。成蹟衆を超へ常に優等の地位を占め居が、此事何時しか其筋に達し、此程、金一圓を下賜されたり。

◎女敎師の定期叙勳　寶冠章は從來勳五等迄ありしを、明治二十七八年戰役に於て、篤志看護婦等に授與するの必要より、勳八等迄設けたるも、爾來女官吏に授けたる事なかりしが、今回、女敎員にして、定期に達したる者あるより、叙勳の奏請を爲したる由なれば、近々、右に對し、叙勳の御沙汰あるべしと云ふ。

◎伊太利皇太后の慈善　伊太利皇太后マーガレツトは、先王の遺產として、四十萬磅を承け繼がれ、尙又た、同國政府は、年々四萬磅を同皇后呈することに決したさうだ。而しては、天性文學音樂美術を嗜好せらるゝを以て、今後は、寡居の生涯を、文學の爲に捧げられ、年々二萬八千磅を、支出遊されてより、青年作家を獎勵せらるゝとか申す。

◎正直　神戸花賣商灘善七賣高を計算するに當り、受取りし覺えなき十錢銀貨を發見し、百方尋思したる末、東丈太郎方にて、一錢五厘の花を賣りし時、誤りて、受取りたるならんと考へ再三丈太郎方に至りて、之を返さんとするも受取らず遂に、丈太郎の留宅宅へ投込み歸り、双方相讓りて下らず不得已二人相携へて、警察署に訴へ出でたり。

◎美擧　婦人の徳性を涵養し、品位を高尚せんことを目的として、組織したる、秋田の淺舞婦人會は、武德會の趣意を賛成し、常集會の茶菓を節して、會員殘らず入會を申込めり。美事と云ふべし。

◉世界最古の小説　世界に於ける、最も古き小説は、埃及の古墳に於て發見したるものにして、専門家は、過ぐる十年間、之が研究に從事せしが、原文は、象形文字を以て綴られ、今や其の多くは、英語に翻譯せられたりと。中には、三千年以上、五千年位經たるものあり。是は、ハロ王朝に事へたる、講談師の如きもの丶、案出せる、小説を蒐めたるものと云ふ。

◉火星の通信　ドグラス教授が、火星面上、アイケリアン海の北に方りて、認めたりと云ふ、明光に就て、巴里のフランマリオン教授は、火星住民の地球に對する、信號あらんとの説を、否定して、是は、アイケリアン海附近に於て、火星の雰圍氣中にのみ、存する、一種の雲に、日光の反映せるものありと説明し、且つ、火星人が、地球人と、交通を開かんとしつ丶ありとの説を信ぜず、然れど、フランマリオン氏は、火星人と通信するは、爲し得べきものと云ひ、シーモル教授の説を賛して、波爾多、馬耳塞、斯達拉斯堡、巴里、安特堤、哥卑合給及び、斯徳哥摩に於て、同時に、光明を放ち、以て、大熊星の形を現はさしむるを、可とせる由にて、二月九日を期し。此の問題に就き、講演を爲す筈ありと。

◉雪中竹　今年歌御會のをり、撰歌の榮をになひし、中島歌子刀自は、世に聞えたる歌人（東京小石川安藤坂）なり。刀自は、武藏の郷士、故中島又左衛門の一女、弘化元年、入間郡森戸村に生る。幼にして、兩親に携へられ、江戸牛込に住み、中村某（敬宇の父）の門に入りて、漢學を修め、十歳にして、松平播磨守（水戸の分家）の奥に仕ふ。十五歳に及び、水藩の士、黒澤忠三郎（櫻田徒黨の一人）に養はれ、十八歳にして、其の甥、忠左衛

…爲に毀れ、刀
…、夫の遺物を
…ら、之を撿す
白羽二重の肌
そをしけれ

…、嘗て、日へ
…、先づ、必ら

心苦しとて　唯　拔く則はる御題の歌よみて上り
し中に、

朝の雪

いつの間に積りし今朝の雪ならむ
　曉までは月を見えしを

隱士出山

山清水くむ人絶しあとにこそ
　濁なき世の影は見えけれ

と、心床しき刀自にこそ。

文壇未だ舊態を脱する能はざりし、此時に當り、新…
參たるは、吾等の頗る寒心に堪へざる處の時や、
久保天隨、八杉蒼舟、大谷繞石等の大に謀るあり
以て、文壇此の甦蘇兒の耋辞を開くに至らし…

嘗て、曰へ
先づ、必ら
趣意、行文共
なるなれば、
は、其の體
たりと、予
に遇ふごと
せざるはな
欄を新設し

豪たるは、吾等の頗る寒心に堪へざる處。時や、久保天隨、八杉蠡舟、大谷繞石等の大に謀るなり以て、文壇此の麒麟兒の產聲を聞くに至らしむは、吾人の聊か意を強ふするに足る、卷中收む所の十數篇、皆現時知名の文士が筆になり、詩味津々として、流石は、初號ながら、體裁能く整ひ、殊に、蝶二、蠡舟が時評の如き、看るべきの文字少からず。一見恰も、帝國文學の姉妹とも云ふべき、文學的好雜誌にして、毎月一回なり、彼、揭言して曰、吾曹一日の長を以てし、滿天下靑年



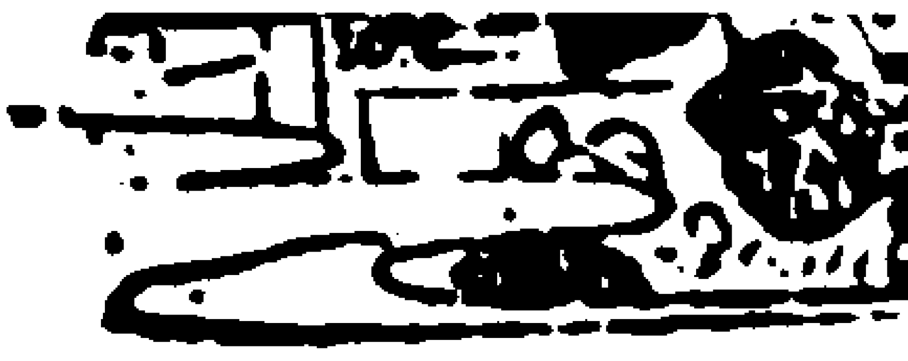
家庭雜誌爲
誌にして、
一回なる可憐
詞林、家庭、
几々初刊とし
主義とする處
婦人の智德を
と云ふにあ

の伯林にありと雖も、尙、筆を絕ず、吾人をして、漣の少年世界か、少年世界の漣かとの語をなさしむるに至るも、所以なきに非ず、其の海外に去るに及で、江見水蔭衣鉢を受く水蔭や、硯友社中健筆の士、彼れ能く冒險談を好む、劈頭先、鍾乳洞探撿記を公にす、行文例の言文一致的にて、趣味津々讀者をして、或は戰慄、或は快哉を呼ばしむ、少年の好雜誌。

[illegible]

吹く風にかほらざりせばこのあさけ
ゆきさやみましうめのはつはな　北島功子

吹く風はあられましりにさむけれど　北島[illegible]子



とも子

きけり

ころく子

はなもかきねにちかづきけり

吹く風にかほらざりせばこのあさけ
ゆきとやみましうゆのはつはな　北島功子

吹く風はあられましりにさむけれど
うめははる日とほゝゑみにけり　北島松子

みなみむきの小窓のあたり春たけて
梅ものどかにさきそめにけり　北島操子

春はまだ三十日ばかりのへだてなも
こゑてぞかほるかきのうめが香　河合繼子

香をこめて我こそめづのうくひすは
ま來ぬふゆのうめのはつはな　三宅中枝子

去年うゑしみなみおもての梅のはな
としのはじめにさきそめにけり　鍋田龍子

立かへるとしにあはむのこゝろから
さむさにまけずうめはさくらむ　服部敞子

冬ふかきまなびのまどもあけてみむ
すきまのかぜはうめが香そする　服部正子

隣のはつねきかむとわれまてど　金井きね子

ろ

多久はつ子

かな

清原くに子

な

岡井かれ子

星野かう子

め

井川はま子

り

谷崎まつも子

そはや

梅が枝にはやくもつもろしらゆきは
はなさいろかだきそふなるらむ　　須佐きん子

かされきの袖またさむきあさかぜに
はやくもかをろうめのはなかな　　飯塚まつ子

冬がれてこずゑさびしきなりからに
はるなもまたでにほふうめが枝　　小川つる子

春またて咲きにほひけりうめのはな
たさまれろ世のつゆのめぐみに　　山田智恵子

いつの間にほころびにけん我が庭に
かなりゆかしきうめのはつはな　　金井梅子

うぐひすもしらでや山にこもるらむ
はるにさきだつうめのもつはな　　柴田信子

わが宿のにはのふる木のゆき間より　　丸城さなり子

富岡美喜能子

なる

岩田よね子

り

清水てふ子

にて、君が代を歌ひ祝するこゑのかすかにきこえ
しあぞ、皆、何事もよろこばしかりしに、又二日三
日とうちつゞく晴天にて、何方にても、皆よろこ

石田よれ子
清水てふ子
名かな子
網　八千代子
田さも子
井さい子

いて　君が代を歌ひ祝するこゑのかすかにきこえしなど、皆、何事もよろこばしかりしに、又二日三日とうちつゞく晴天にて、何方にても、皆よろこび笑ふこゑのみいとにぎはしく、軒ばにさへづる雀の千代千代とよびなど、榮え行くらむ御代のしるしにや。市中の樣など皆よく知らせたまふべく、拙きふでにさまではと書洩し候。かしこ。先はかく一事申にあん

人

東京下谷區西町一番地　井川はま子

年のはじめのほきことと奉りしより、何くれと、打紛るゝ事どもも侍りて、心ならずも過し侍りし罪、さるかたにゆるしたまひてよ。さて、いつかたにてもゆたかなる御代の年のはじめの例とて、軒端の梅も笑み榮え、軒ごとに立てそふ日の御旗は、

許様はじめ、皆
遊ばされ、さぞか
も田舎にて目出
召たまはり度候。
よき新年には
別にかはりたる
お散りはてたる
、其の上に、い
、えも言はれず。
立ちのぼりたる
、都にてもわる

…しこ。ほんに正月で
栗田信子
…のけふさのみ思ひ居
…り申候。さても、あ

石黒きふ子

新玉の御祝ひ、都もひなも、押しなべていさ賑しく候へども、當
地はここに都の事さて、若きも老も羽子つきかはし、又、かるたさ
りて遊びなごし、元日は、女にても、手始に出で、居蘇なご頂き、
二日は、初荷さて商人の商買始めにて、荷車を馬に引かせ、音樂
隊などはやしをつけて、いさ〳〵賑しく、夜にあひなり候へば、
御寶さよびて寶物に參り候へば。如何なる事に候かさ人にたづね
申候處、寶を紙にかきしものにて、いぬる時に枕の下にしきてれ
候へば、よき正夢を見らるゝさかの由申候。又、男子などはたこ
あげて遊び、女の子のいさ〳〵かはゆらしきが、羽子つき毬なつ
き、始めての私故、見るもの聞くもの皆面白く覺ね申候。殊によ
ろしく覺ね候は、雪少しも降り申さず候へば、外出いたすこも都
合よろしく、方々見あるき申候。しかし、かやうに賑しく、物め
づらしく存じ候へ共、雪少しも之なく候へば、何さなう正月の心

猶ゝ筆にて申上候。はや元日もいつしか過ぎ去り、一月も中旬と
相成候得ども、東京は、いまだ正月めいて何にかさわがし…
ず、彼處にも、加留多、こなたにも加留多會にて、遊びにいそが
しく候、正月は、都もひなも同じ事さは存じ候へども、殊に、東
京の…

田信子

さのみ思ひ居
。さても、あ
りはこれなく
さて、聞く者
立てられたる
風に、日の御旗
々の、馬車に
、幼き小兒の
るばかりに繁
其のしなりぼ
。まだく\、
れ後の便りに

多はる子
、いさ得けく

拝賀して申上候、はや元日もいつしか過ぎ去り、一月も中旬さ相成候得ども、東京は、いまだ、正月めいて何にかさ心おちつかず、彼處にも、加留多、こなたにも加留多會にて、遊びにいそがしく候、正月は、都もひなも同じ事さは存じ候へども、殊に、東京の三が日は賑はしく、さても口にては申されず候。市中は、松竹國旗門々には綠門を作り、獅子の舞太鼓のはやし等にてにぎはしく、家々は、朝まだきより、年頭者がはろく\おさなひ、家の隅に引こもり居りても、何にさなく正月らしく、此の有樣御目にかけ度などゞつぶやかれ候。今年の一月は、不幸にも、十二月の三十日より風邪にて打臥し、元日はたゞ雜煮丈を食し、學校にも出席せず、たゞく\むなしく過し候ひしが、三日頃より風も全快し、友達も見舞かたぐ\年始にもおさなはれ、かるた福引、或は庭に出で羽子なつきなど、誠にたのしく過し候。御國の御正月はいかゞすごさせたまひし。御樣子なも御知らせ下され度あらく\かしこ。

關口きせ子

うらく\さあけしはつ日の出、いまだ春にはあられざ、今日この頃は、何んさなうのどけく覺ね候。都にてはすべて、なにわざに

鐵に賑しき年さよろ
の御やうすも御識し

高洲八重子

ふ實におたやかに、
て、常盤の松の深緑
出たしさも芽出度な
打揃ひ給ひてあし
こほきまいらす、こ
御心安ふおほし給へ
がたくなむ、ここに
積みまつるにこそ何
の糸なかき日にゆつ

吉富波子

吉弘周子

白たへのゆきのふる枝のよはなへて
はなさなりけりささのたかむら　仁保甚子

ふしごさは千代をこめたるくれ竹に
やさかつもれるゆきのはなびら　徳永萬壽子

かはらじさみさをを千代も萬づ代も
ゆきのなかよりたつるくれたけ　徳永廣子

ふる雪にうづもれてこそくれたけの
よにぬけいでしふしはみえけれ　友永常子

ふりつもる雪のうちにもゆたかなる
みよのすがたになびくくれたけ　知千波楢子

すなほなる竹のよごさに千代こめて
ふるしらゆきのいろぞゆかしき　岡本榮喜子

ふる雪にみさをもたかくあらわれて
かぜになびける千代のくれたけ　吉富理能子

大君のめぐみになびく民ぐさに
ゆき積む竹のすがたなりけり　すみれ子

軍艦

外國のあら

富波子
弘周子
添房子
代豔子
代綾子
代由子
形富子
楽院圓子
井小谷子

ゆき積む竹のすがたなりけり　福原　すみれ子

軍艦

外國のあらしにさわぐあだなみを
　うちしづめたるいくさふねかな　石井豊子

日の御旗たかくかゝげて大みいつ
　四方にかゞやくくろがねのふね　仁保志摩子

あら海のへだてのかきとなる艦は
　すめらみくにのまもりなりけり　仁保基子

外國をかけてみいつをかゝやかす
　みいくさふねぞ世のたからなる　徳永萬壽子

國をまもるますら武雄が家さして
　うみ路をめぐるこのいくさふね　田代豔子

皇國のみたてとなりていくさふね
　うちはなつ砲のおとのするどき　佐々有鄰子

はるかなる浪をけたててはしりゆく
　わが日のもとのいくさふねぞな　徳永廣子

は今日なるぞ大和魂●

〃 藤雲子

わした代りに殺してさ
さしもに猛き泥棒も
世にはやさしき稚兒も
此子の金が取られよぞ
其儘其處を立ち去れり
遂にお上へ召し捕られ
お上へお富を召出し
兄を助けて弟を
白銀多く玉ひたる
大阪中に名も高き
己が養女さしたりける

やさしき聲で言ひければ
互に顔を見合して
あればあるもの何さして
許せや許せさ賊共は
やがて一人の泥棒が
具さに申上ければ
年はも行かぬ子供にて
かばひたるこさ神妙さ
此事役に聞き出して
炭屋彦兵衛が貰ひ受け
吾等が手本の數あり

拾銭用一割増らず然れどか旗幟を翻

生七十餘年の爲に粉骨しもの推して當斗となす豈過稱

第二部第二回講習來二月四日ヨリ十一月末マデ九ケ月開設

女子高等師範學校入學豫備及ビ高等普通學科補習ノタメ左ノ學科講習●國語（講讀文法）●算術（百分算マデ）●幾何（平面立体）●歴史（日本東西洋）●理科（理化博物）

第一部（高等女學校第三年入學準備ノモノ）及ビ英語部モ引續キ講習ス此際入會ヲ許ス○本會ノ各部ニ關スル講師左ノ如シ（イロハ順）

○女子高等師範學校教諭藤堂忠次郎○高等師範學校教授吉田彌平○立教中學校教諭高島省三○東京府第二高等女學校教諭[illegible]

論

全一冊洋假裝美本
定價卅錢郵稅四錢
郵劵代用必ず一割增を要す

之を救ふの法唯だ勤儉貯蓄の奬勵にあり國家經濟の泰斗として雷に此に慨し即ち此著作あり此書や投機奢侈の害毒勤儉奬勵の必に論せられたる者將又理を推し數を抑へ古今を俯仰し東西を反業家政治家及教育家は勿論苟も日本臣民たる者特に子弟の教育のらざる寶典たることを疑はず

全一冊洋假裝頗美本
定價金四十錢郵稅六



…み陳列せしが今般
…し總て最廉の正價
…覧撰擇の便に供す

…社印刷部印刷